ピカチュウと極彩色

奈倉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ピカチュウと極彩色

【Ｎコード】
Ｎ５８５５Ｑ

【作者名】
奈倉

【あらすじ】
人間の世界で絵を描いて暮らしていたクロガネは、ある日突然ポケモンの姿になっていた！　ピカチュウなのに電気技も何故か使うことが出来ない。そして背中には一本の万年筆・・・
これから始まるのは、そんなピカチュウ達の‘護る’物語。いざ、暗色の闇を狩れ！

chapter ―02　プロローグ（前書き）

どうも！　作者のＲｅｎです♪

皆知ってるピカチュウのストーリーを書いてみたくなり、このお話を思いつきました！

気に入っていただければ幸いです

それでは

プロローグ、スタート！！

chapter ―02　プロローグ

・・・とある洞窟にて・・・

「おい、小僧どうした?!　ビビッて攻撃も出来ないのかよォ?」
「ぐっ・・・。」
水色の体に白いお腹、首にスカーフを身に着けたマリルは、紫がかったマッチョな体のポケモン、ゴーリキーに追い詰められていた。
このゴーリキーはお尋ね者として賞金が賭けられていた。
マリルはその依頼を受け、この地に来ていたのだが・・・

「ったく、新米探検隊に舐められたもんだぜェ・・・。」

ゴーリキーは思っていたよりも強力なお尋ね者だった。
じりじりと迫ってくる。
マリルも震える足で一歩一歩下がる。
その時、背中に何かが触れた。

（!　壁・・・!!!）

完全に行き止まりだった。
ゴーリキーは腕をポキポキと鳴らした。

「もう逃げられねぇぜ?」

ゴーリキーは腕を振り上げる。
マリルは目をギュッと瞑った。

（誰か・・・助けてくれっ・・・・！！）

「これで終わりだあッ！！」

マリルの顔面目掛け振り下ろされる太い腕。
しかし、その瞬間、後ろから声がした。

「そこまでだ！　お尋ね者ゴーリキー！！」

腕は空中で止まり、ゴーリキーが声の方を向く。
マリルも、そっと目をあけた。

「ピ、ピカチュウ？！」

そこに立っていたのは、黄色い体に赤い頬が目立つピカチュウであった。
だが少しおかしい。
そう、このピカチュウは、何故か背中に万年筆を背負っていた。

「な、何だてめえ？！」

「ん、オレか？　オレの名はクロガネだ。てめぇのその腐った脳に刻み込んどけ！！」

ピカチュウはそう言うと背中の万年筆を取り出した。
万年筆はピカチュウの体長の2倍ほどの長さだったが、ピカチュウは軽々と持ち上げその先をゴーリキーへと向ける。

「随分偉そうな口の利き方じゃねえか、ああ？！！」

「うっせえんだよ、黙れこのマッチョ！！」

「何だとお・・・？！！」

ゴーリキーは挑発に乗って『気合パンチ』を構える。

「くたばりやがれ！！」

拳から衝撃波が発生した。
その衝撃波は一直線にピカチュウへと向かう。
まともに食らったらひとたまりも無いだろう。
しかしピカチュウは慌てもせず万年筆を一振りした。
衝撃波がペン先とぶつかり、あっという間に空気へと戻っていった。

「そんな・・・っ、俺の最強技が・・・こんな簡単に・・・・。」

ゴーリキーは目の前のピカチュウを凝視した。
その体が小刻みに震えだした。
その様子を見てピカチュウは微笑した。

「一つ教えといてやろう・・・・。」

ピカチュウは万年筆の先を再びゴーリキーに向ける。
そのまま一歩一歩近づいていく。
ペン先から黒いインクが滴り落ちた。

「オレはどうしてだか電気技が使えねぇんだ。だがその代わりに・・・ある技をただ一つだけ覚えてた。それを今、お前にお見舞いしてやろう！」

ピカチュウは万年筆を振り上げ、高く飛び上がった。
ゴーリキーは口を開けて金縛りにあったように動かない。
ピカチュウはそのままペン先を頭に向け、真っ直ぐ振り下ろす。

「食らえ！　『万年殺し』ィィイ！！」

「ぎいやあああああぁぁぁぁああ！！！！！！」

洞窟に、哀れなポケモンの悲鳴が響いた。

「よっしゃあ！　お尋ね者逮捕ォ！！」

ピカチュウはガッツポーズをした。
ゴーリキーの両腕には、黒光りする手錠が、しっかりと掛けられている。
静かに万年筆をキャップへ収め、背中のホルダーにかけた。

「あの・・・。」

後ろから声がした。
振り返ると、暗闇の中からマリルが歩いてきた。

「えっと、ありがとう・・・ございます・・・。僕を、助けてくれて。」

マリルは涙の残る顔を下げた。
ピカチュウは苦笑して頭を掻いた。

「まあそう硬くならずに。次はちゃんと依頼を選べよ。」

ピカチュウの口調は、先程とは全く違っていた。
キレると怖い性格なんだな、とマリルはこのとき悟った。

「あなた達は・・・探検隊なのですか？」

「いや、違うよ。オレは、ただの住民だ。」

マリルは驚いた。
一般人がこんなに強いはずがない！
マリルはピカチュウの力量（レベル）を調べるため、咄嗟にステータスを見てみた。
ちなみにステータスとは、探検隊が必ず持参している、ポケモン図鑑のような物だ。
ステータスの電源をＯＮにし、‘クロガネ’と検索してみる。
検索完了の音が鳴る。ステータスには、こう記されていた。

クロガネ

性別：♀

年齢：およそ１３歳（不明な為身体能力で判断した結果）

その他不明

一年前に突然倒れている所を発見される。本人は，元人間，と話しているが、正しい事は分かっていない。

chapter ―02　プロローグ（後書き）

クロガネ：初めましてだな。オレはクロガネだ、よろしく！

こう見えても女の子なので（汗

クロガネ：そんな事より次回は？

プロローグ2回目だよ♪

次回も新キャラが登場ですのでお楽しみに★

chapter　―01　ギルド狩り（前書き）

今回はプロローグのエピローグです！

クロガネ：なんだそりゃ（汗

それじゃあ　Let's　go！

chapter ―01　ギルド狩り

「ええ～？！！元人間？！」

マリルは彼女のプロフィールを見て驚いた。
そもそも人間というのはこの世界には存在していない。

「そうなんだよな～、気がついたら草原のど真ん中に倒れててさ。
オレ、人間界では漫画家っていう職業についてた事しか覚えてなくて。こいつは・・・だから・・・オレの愛用してた大事なペンなんだよ。」

クロガネはそういいながら、背中の万年筆を親指で指した。
瞳が少し揺れている。

（帰りたいって、思ってるのかな・・・もとの世界に・・・。）

マリルは視線を万年筆に置いて、考えていた。
別世界に来るって、一体どんな気持ちがするのだろう・・・？
きっと想像できる物ではないのだろう。
天井から雫が落ちた。
いつの間にか出来ていた水溜りに落ちて、波紋が広がっていく。
何か話す物はないかと、マリルは必死に考えていた。

「ねえ、クロガネさんは・・・その・・・探検隊とか、やらないの？」

「あ？」

突然彼女は顔を上げる。
マリルは構わず続けた。

「さっきのあの技、とっても凄かったし・・・何よりクロガネさんに合ってる気がするんだ・・・。」

クロガネは考える顔になった。
それは悩んでいると言うより、探検隊について理解できていないような物である。
マリルはふっと息を漏らして微笑み、バッグから探検隊バッジを取り出した。

「とりあえず、ボクのギルドに来てよ。」

「え？」

バッジを翳した。
するとそれは急に光りだして2人を包み込む。

「な、何だこれ？！」

いつの間にかクロガネ達を光の空間が包み込んでいる。
体が浮く。何かに持ち上げられてるような感覚だ。

「ギルド　ファイアー・クリスタルへ・・・！」

その瞬間2匹は洞窟から姿を消した。

「親方〜！　只今戻りました！！」

気がつくと見た事も無い場所に立っている。
気持ちいい風に、下には水色に染まった海が、真昼の太陽を受けて輝いていた。
マリルの目の前には、何やら‘ブーバーン’というポケモンをイメージして作られたドーム型の建物が聳え立っている。
マリルが大声で叫ぶと中からポケモンが出てきた。
赤い体に黄色い腕、少し厳つい顔をした、爆炎ポケモンブーバーンである。

「おう！　マリルか！　今日も依・・・ん？　後ろのピカチュウは誰だ？」

ブーバーンは太く陽気な声でマリルに話しかけるが、すぐに後ろのクロガネに気づいて眉を寄せた。

「ああ・・・親方、この人にちょっと助けてもらったんだ。長くなるけど、いいかな？」

「勿論いいが・・・お客さん、中に入れてやろうぜ。」

ブーバーンは笑みを浮かべ、後ろの建物を顎で杓った。

「うおお・・・。」

建物の中は外よりも過ごしやすく、地下に部屋が何個も積み重なっていて想像以上の広さだった。
中にはさまざまなポケモンがいて、皆マリルと同じバッジをつけている。

「どうだ？　驚いたか？」

ブーバーンは地下2階の広場の椅子に2人を座らせ、高らかに笑った。

「ああ。とても・・・広くて・・・沢山ポケモンがいる。」

クロガネは辺りを見回しながら口を開いた。
伝説のポケモンでも手が届かない位の高さの天井には、あちこちにライトが付けられ、暖かな光が部屋全体を照らしている。

「ここは昔は小さなギルドだったんだが、今じゃあこんなにデカくなって、名前もあのプクリンのギルドと並ぶほどになった。」

ブーバーンはクロガネと同じ場所を見ながら目を細めた。

「プクリンのギルド？」

クロガネはブーバーンを見て首を傾げた。
その様子を見ると彼は驚いてクロガネを凝視した。

「お、お前、プクリンのギルドも知らないのか？！」

ブーバーンは体を乗り出してクロガネを嘗め回すように見つめた。

背中の万年筆に目が留まる。

「その・・・万年筆・・・お前、名前は？」

「クロガネ、だけど？」

彼はその名前を聞いて顔を顰めた。

頷いてから何か呟いている。

「一年前突然現れ、その驚異的な強さでポケモンたちを倒していった・・・プクリンの再来と言われたピカチュウがいるとは聞いていたが、まさかこいつだとはな・・・。」

彼は腕組みをして微笑む。

逆にクロガネはそんな異名が流れていたとは全く知らず、顔を顰めた。

「7年前だ。‘星の停止事件’っていうのがあってな、ダークライというポケモンの野望によってこの世界が征服されそうになったときがあったんだ。」

ブーバーンはクロガネから密かに感じていた。

あの正義の探検隊、チーム・カゲロウの面影を。

「ダークライによってこの世界が闇に染まろうとした時・・・ある弱小チームが勇敢にもダークライに戦いを挑んだ。」

「ある、弱小チーム？」

クロガネは続きを急いだ。

マリルは頷いてブーバーンの話に耳を傾けている。

「チーム・カゲロウってな・・・元人間だったキモリとヒノアラシのチームだ。カゲロウはこの世界を救ったんだ。」

「元・・・人間・・・！」

「実は俺は、その時ダークライの部下だったんだ。・・・だが、決戦の地で奴等と本気で戦ってみて、何だかな・・・全てが馬鹿らしくなっちまって、こうしてギルドを始めたんだ。」

ブーバーンは笑っている。その笑顔に偽りは無い。

クロガネは静かに、そうだったのかと呟いた。

「全てが平和に戻った・・・筈なんだが、最近また可笑しい事になってきている。」

彼の表情が険しい物になった。

突然空気が張り詰めクロガネはゴクリと息を呑む。

「変な族共が結成した探検隊は前から居たんだが、今じゃギルドを立ち上げる奴等も出だして、俺らは‘ブラック・ギルド’と呼んでる。主に暗殺等の良からぬ依頼のみを受けその仕事をこなしている、許されん連中だ。・・・まあ俺が言えることじゃあないが・・・。」

クロガネは黙り込んだ。

「俺たちもそいつ等に対抗しようとある組織を作った。」

「それが‘ギルド狩り’だよ・・・。」

マリルが真剣な目つきでクロガネに話した。
ブーバーンは机に肘をついて彼女を見つめた。

「そこで、だ・・・。
お前、ギルド狩りにならねえか？」

「ええ？」

クロガネは驚いて前に乗り出した。
あまりの勢いに机が揺れる。

「確かに、興味はあるが・・・。」

「じゃあ、決まりだね！」

「え。」

「俺のお勧めのギルドがある。丁度行く所だ。着いて来い！」

クロガネは戸惑いながらもしぶしぶブーバーンに着いて行った。

小さなピカチュウによる、大いなる冒険が今、幕を開けようとしていた・・・

chapter ―01　ギルド狩り（後書き）

クロガネ：ギルド狩りって具体的に何だよ、それに今から行くギルドって？！

次回で分かるよ♪

chapter ±0　ギルド、ロイヤル・クオーツ、（前書き）

いよいよ第3話！

クロガネ：どんなギルドなのか、楽しみだぜ！

神キャラ・・・いやいや新キャラもどどーんと登場です！

それではいってみよぉ→♪＾＾＊

chapter ±0　ギルド、ロイヤル・クオーツ、

「ったく、まだ着かないのかよ?!」

ブーバーンに引っ張られ、クロガネがやってきたのはジャングルの奥だった。
見渡す限り、緑、緑、緑。背の高い植物が所狭しと生えていて、その周りを蜜を求め虫達が這い回っている。真上から太陽が照り付けていた。

「何、今見えてきたところだ。」

クロガネは息を切らしながら、前を見た。
ブーバーンの背中で視界がさえぎられていたが、ちらりと滝が目に映る。

「アレだ。」

急に視界が開けた。
耳元をブンブン飛び回っていた虫の羽音もピタリと止み、先程とは違う透き通る匂いが体を包み込む。
ジャングルを抜けたのだ。
冷たい何かが頬に飛び散った。水だ。
顔を上げると、滝が流れていた。大きさも相当なもので、近づくと針のように水が降りかかってくる。

「こっちだ。」

ブーバーンが顎で前の方を杓った。
クロガネは頷くと走ってブーバーンについて行く。

そのままブーバーンは滝の裏側へ回っていった。
驚く事に滝の後ろには洞窟があった。背後には水が轟々と落ちて行き、外の光を僅かに通している。
ひんやりとした空気が触れた。

「着いたぞ。ここが、ブラック・ギルド狩りのギルド、‘ロイヤル・クオーツ’だ。」

「ここが・・・。」

「入るぞ。」

クロガネとブーバーンは洞窟に一歩踏み出した。

中は鍾乳洞のような造りになっていた。岩の突起から雫が落ちてくる。
しばらく歩いていると、前方にオレンジ色の光が見えてきた。

「灯り・・・！」

クロガネは奥へと駆けて行った。

中は思ったより薄暗く、何となく暖かかったオレンジの光もただの怪しげなランプだという事が分かり、クロガネは肩を落とした。
本当にここがギルドなのか？
先程訪ねたブーバーンのギルドとは比べ物にならない位設備も整ってない。
掃除だけはきちんとしてあるらしく整理してあるが、置かれている机や椅子は何だか酒屋のような木造で、ポケモンも少ない。
（何だかよくわからねえが、面白そうな所だな。）
クロガネにはそういった景色が，強そうな奴等，の住処に見えた。
更に奥へと進む。普通のポケモンなら、周りにはマフィアの集団がいるようにしか見えないだろう。
周りにいるポケモンたちは、クロガネを見ると突然顔の色を変え、何やら集まってコソコソと話し始めた。
（？）
「クロガネ、この奥にここの親方がおられるぞ。」
「ん・・・、ああ。」
クロガネは視線をポケモンたちに向けながらも、足を進めた。
カウンターのような場所に、一匹のポケモンがいた。
何だか周りのマフィア達が持っているビール瓶よりも一回り大きい

瓶を持っていて、酔いつぶれているのか顔はほんのりと赤くなっている。
藍色の体にジェット機のような突起が頭についている、ガブリアスだ。

「おい。てめぇがここの親方か？」

クロガネは好奇心いっぱいに訪ねた。
ここはギルドというより、知る人ぞ知る地下の極秘の酒屋だ。
契約を交わしたマフィア同士がここに集まり、悪巧みをしている。
そんな気がしてならない。
しかし、そういった風景が‘味’と言う物を出している。きっとそうだ。

「あ、ああ。お前、クロガネだな、ブーバーンから話は聞いている。こんな所で何だが、ようこそ、‘ロイヤル・クオーツ’へ。」

ガブリアスはすこししゃくりながら話した。

「相変わらずだな。」

ブーバーンは呆れつつも、笑って話しかけた。

「早速だが、お前のメンバーを紹介する。着いてこい。ああ、ブーバーンは帰っていいぞ。」

「何だよその言い方?!　まあでもクロガネをよろしく頼むぞ。」

ブーバーンはそういうと‘酒屋（ギルド）’を出て行った。

「ありがとな〜！　ブーバーンの親方！！」

クロガネは両手で手を振った。ブーバーンは振り返りもせず右手をそっと上げるだけだった。

「さあ、こっちだよ。」

ガブリアスが奥へと入っていく。クロガネもその後ろを追った。

（！）

奥は外の酒屋よりも随分と綺麗で広かった。ただ酒屋には変わりなかったが。

テーブルはどれも新しいもので、新鮮な木の香りがするし、植物も所々植えてあって空気もさっきよりは美味しい気がした。

ガブリアスはその内一つのテーブルへ向かった。

そのテーブルでは尻尾に火のついた赤いトカゲのようなポケモン、リザードと、黒い体にリボンのような物が付いている小悪魔系ポケモン、ゴチミルが何か楽しそうな話をしながらジュースを飲んでいた。

「あれ？　親方？」

ゴチミルが親方に気づいて首を傾げた。
目が、「そのピカチュウは誰？」と言っている。
「お前等の新しいメンバーだ。今から自己紹介をする。」
ガブリアスは空いている席に座った。
クロガネも座ろうとするが、椅子が無い。
「お前は立ってろ。新入なんだから礼儀としては上等だろ？」
悔しいが最もな意見なので言い返せない。
（ちぇっ・・・何なんだよ・・・）
「まず俺からだ。さっきも言ったが、ここの親方、ギアスだ。よろしくな。」
ギアスはそう言い終わると、視線をリザードに向けた。
リザードはその様子に気づいて慌てて自己紹介を始めた。
「あ、ああ。俺はディアン！　よろしくな！　んで、こっちは相棒の・・・」
「ユリアよ。よろしくね。」
リザードの隣に座っていたゴチミルが、僅かに微笑む。
彼女が、あなたは？、と尋ねてきた。
「オレは、クロガネだ！　よろしくな。」

クロガネは偽りの無い笑顔を浮かべた。
こいつらなら、大丈夫。
何故だか分からない。不安でもないのに、ここはとても安心できる場所のように思えた。

こうして、クロガネはギルド、ロイヤル・クオーツに入隊したのである。

chapter ±0　ギルド，ロイヤル・クオーツ，（後書き）

ディアン：というわけでどうも！　リザードのディアンだ！

ユリア：ゴチミルのユリアよ。

クロガネ：こいつ等と戦っていくのか～♪楽しみだ

ギアス：俺もいるのに・・・（泣

次回はいよいよブラック・ギルドが動き出す？！

クロガネ：事件の予感だな

お楽しみに♪（＾ω＾）／

ｃｈａｐｔｅｒ　＋０１　クロック・アースへ（前書き）

さあて、いよいよクロガネ達もギルド狩りだね！

クロガネ：ブラック・ギルドっつー悪を正してやろーじゃんよ！！

ユリア：気合入ってるわね！　それでこそ、ロイヤル・クオーツ、よ！！

ディアン：俺も全力で行くぜ！！

それじゃ第４話スタート！！

chapter ＋01　クロック・アースへ

書　大神アルスの記録　より

第一章　リーマン童話　あくまとむら

最果ての地、クロックアース
そこには小さな村があった

ロディ・ピールス

それが村の名前
クロックアースの言葉で、永遠(とわ)の平和という意味だ
今日も村人達は働く
平和を守り続けるために
今日も子供達は歌う
悲劇を繰り返さないように・・・・・・

むかし　とおいむかしのはなし
へいわなむらが　ありました
むらびとたちは　いつも　えがお
きょうも　はたけをたがやします

あるひ　あくまがやってきて
むらは　あくまに　たべられて
ひとびとは　ないて　かなしみました

そこに　ひとりの　まじゅつしがやってきました

むらびとは　たすけを　もとめました
まじゅつしは　じゅもんを　となえました
あくまは　くるしそうに　ゆがんで

ちいさな　どうぶつに　なりました

あくまは　もう　わるさを　しません

きおくが　なくなってしまったから

むらびとは　よろこび
まじゅつしに　たくさんの　ごちそうをしました

それから　むらは　へいわに　なり
まじゅつしは　さっていきました

もう、あの悲劇を、繰り返してはならない
子供達は、そう、泣きながらこの唄を謡う

「ここかあ、クロックアースは。」

ディアンが息を切らしながら麓を見下ろす。
丸一日山を登ってきたからか、足が痛んだ。
だが登った甲斐もあって、待っていたのは目を見張る絶景だった。

「綺麗だな・・・。」

目の前には上り始めた太陽が顔を出し、眼下には真っ白なレンガの建物が規則的に並んで建てられている。
このような建て方を‘ケイデンの美の建築法’というらしい。
白い壁が新鮮な空気を醸し出しているようで、言葉では表現し難い美しさだ。

そして北東には最も高いとされる、‘ヘヴン・ブリッジ’という山が聳え立っている。

世界で最も高く、美しい「成層火山」の形をしており、今自分達が立っている山などとても比べ物にならない。
ちなみに意味は・・・ご理解いただけるだろうか？

「今回は、ロディ・ピールスの‘ビシャス・シグナル’ってとこを狩るらしいわ。」

ユリアが依頼書を広げた。
中央には大きく‘ビシャス（あくまのしらせ）・シグナル’の文字に、ボスらしきドラピオンの顔がはっきりと写されていた。
その歪んだ顔を見て、ユリアがため息をついた。

「イケメンじゃないわ。」

確かに、強そうな顔をしているがあまりにも厳つすぎるので、かっこいい、とはお世辞にも言えない。
それに普通のドラピオンとは少し顔の形が異なっているようにも見える。いままでの戦歴からだろうか。

「前回のギルドのボスはかっこよくて良かったわ～、・・・今は逝っちゃってるけど。」

ユリアがボソッと怖い事を言う。
ディアンの話によると前回のギルドのボスは相当強かったのだがユリアが一撃の技で倒してしまったらしい。
ナンパというこの世で最も恐ろしい技だ。
ボスはユリアにすっかり惚れてしまって自殺をしてしまったそうだ。

「私のために死んで☆」と。

全く愛の力は恐ろしい物だ。
自分はこの顔、割と気に入っているのだが、やはり女性の心というのは謎である。
とここまで考えて自分が女子である事を思い出す。

「この村、これがロディ・ピールスみたいよ。にしても大きいわね。」

たしかに、村とは言えない大きさだ。
そのせいか人目ではどれがブラック・ギルドなのかも検討がつかない。

「とりあえず、降りて捜索よ。それと、宿も探さないとね♪」

「「了解！！」」

ユリアは宿で準備、ディアンは防具の整理、と言う事でクロガネが調査役となった。

町は白いレンガと赤い屋根で統一されていて、落ち着きのある雰囲気だ。

海が近くにあるらしく、潮風が匂って来る。

「いい所だな・・・。」

思わず独り言を呟きたくなる、そんな所だ。

路地を練って歩いていくと、崖に突き当たった。見上げると、覚えがある景色。

どうやらさっきの山のようだ。

斜面を削られ崖のようになっていた。

クロガネは、僅かに鼓動が早くなっていくのを感じていた。

さっきの高い山を見たときもそうだったが、どうやら自分は考古学にロマンを感じているらしい。

神話、歴史、時代・・・そんな言葉を聞くと、自然に気分が高揚してくる。

漫画を描いていたときのオレも、こんな感じを味わっていたのだろうか。

・・・、そっと、崖に触れてみた。

何も起こらない。

触ってみたら記憶も戻るかと思ったんだが、オレの勘違いだったらしい。
笑みがこぼれた。触れた部分の小石が、空しく音を立てて落ちていく。

「さて、調査しないとな。」

少し湿った地面を掻き毟り、強張った口で独り言を呟いてから、クロガネは立ち上がった。

気がつけば、真上に太陽が昇っていた。

「ええ〜〜〜っ?!!!!!!　結局何も分からなかったのぉぉぉぉお?!!!!!!」

真夜中にユリアの声が響いた。全く時間違いな目覚ましだ。

ってそんな事を言っている場合ではない。

此処は今日泊まる宿、‘居龍庵’だ。
実は今日聞き込みが失敗したのをユリアに話した所、このような目覚ましを鳴らす羽目になったのである。

「仕方が無いだろ、今日街中に出会った人に挨拶をしただけで逃げられたんだからさ。」

そう、此処の人はどうしたことかオレと話してもくれない。
話しかけると顔を引きつらせ、

「すみませんでした〜〜〜っっ！！！」

と言って逃げていく。

中には、頭を下げて

「どうかお命だけは！！！」

と言う者もいた。質問をしても同じ事しか言わないので、自らその場を離れた。

「それは、お前・・・！！！！！」

ディアンが何か言おうとすると、ユリアが突然ビンタを食らわせた。
オレが苦笑いをすると、ユリアは満面の笑みで

「どうやらここの人達、旅人を嫌ってるみたいなの。」

と言う。声だけは深刻な物で、どうやら本当の事らしい（信じていいのかは分からないが）。
だが何故ディアンを攻撃したかは謎だ。
そのまま顔を固めていると、ユリアはため息をついた。
疑問に思ったので、聞いてみた。

「ユリア達、オレに・・・隠し事、してる・・・よね？」

無意識だったが、自分が‘問いかけている’より、‘確認している’事に気がつく。

「し・・・してねぇよ、何言ってんだクロガネ。」

歪だった。
口を開く前に表情が急に変わった。本人は笑っているつもりらしい。
だめだよ、全然笑顔になってないよ、ディアン。
言葉を飲み込んだ。今聞いてはいけない気がした。

「・・・まあいいわ。今回のターゲットはジュエル持ちだ、って親方（マスター）から聞いたし。」

「ジュエル持ち？」

「ああ、そういえば、アナタには説明していなかったわね・・・。」

という訳で、ユリアから長い説明をしてもらった。

この世界には、‘ジュエル’と呼ばれる無数の宝石が存在している。
簡単に言えばダイヤモンドとか紫水晶（アメジスト）とかそういうものだ。

以前は正式なギルドの連合軍が保護していたのだが、ある日何者かの手により全て奪われ、この世界に散らばってしまったらしい。
一つで願いを叶え、全て揃えば銀河も滅ぼせるジュエルが、ブラック・ギルドの手に渡れば恐ろしい事になるので、連合軍ではジュエルの回収も任務の一つとして行っているそうだ。
ブラック・ギルドもこの噂を知っているので、ジュエルの奪い合いになっているという。

「まだ連合軍のほうでは一つも回収できていないのよ。だから今回は負けられない戦いになりそうだわ。」

負けられない戦い・・・
聞いただけでわくわくした。だが、変だ。気持ちは高ぶっているのに、他人事のような、実感が無いというか、そんな感じだ。
脳が勝手に作り出した‘思い込みの感情’だと後で気づく。
昔は、漫画家だった。そう、体験ではなく、客観的に、ただ感情移入をするだけの、‘見守る’立場。
ただ、今は違う。

「明日は私もディアンも調査するわ。なんせジュエルがかかっているんですもの。」

「ねえ、ユリア？」

オレはジュエルに興味をもった。
宝石って、美しいし、オカルト的にも、考古学的にも、とっても気になるものだ。
神話にだってなぞらえる事もあるし、神秘の力を感じる。
だから、訊ねずにはいられない。

「今回のジュエルって、どんな宝石なの？」

「今回のは・・・確か・・・」

「追憶の宝石　ローズ・クオーツ，・・・だったわね。」

クロック・アース

ロディ・ピールス

新緑（リーヴ・ヒル）の丘

とある者の呟き

この土地でこいつを見つけてからというもの、不思議とどんな事も上手くいく。
奪ってもばれない、殺しても気づかれない。
壊れた体は一分もあれば回復する。
素晴らしいものだ。
この今の力さえあれば、あの忌々しい‘奴’さえも手懐けるかもしれん。
今まで誰一人として抑えられなかった‘奴’の無限大の力を。
そうすれば我等は・・・・・・フフフフ・・・・・・

「ボス！　ボス！！　ボスーッ！！！！！」

「五月蝿いな、何だ？」

「‘奴’が・・・・‘悪魔’が現れました！！」

「何だと？」

「昼間、町民共が目撃したとの事です！！」

「・・・・・・・。」

「場所は・・・・って、ボス？」

「フフフ・・・ハハハハハハアハハハアハハハハハハハハハハアハ

ッハハハハハハハハ！！！！！」

「どうしちまったんですか？？　ボス！」

「・・・ふう。いや、何でもねぇ。場所は？」

「＊＊＊＊＊＊＊です。」

「なるほど。今すぐ向かうぞ。」

ようやく、野望をかなえるときが来たようだ。

‘奴’がこのタイミングでやってきてくれるとはな。飛んで火に入る夏の虫、ってな。

これもこいつの力だ間違いねえ。

この、‘キセキ（ローズ・クオーツ）を呼ぶ石’でな。

chapter ＋01　クロック・アースへ（後書き）

クロガネ：ジュエル・・・かあ。そういえば！　オレ達のギルドも、宝石っぽい名前だよな。

ユリア：ジュエル回収に協力しているギルドは、大体そういう名前なの。

まあ、そうじゃないとこもあるし、まだまだ協力してくれてるギルドは少ないから私も良く解らないけど。

ディアン：成る程な。俺等がジュエルを回収したら一気に有名って訳だ！！

ユリア：まあ、そういうことになるわね。

クロガネ：ひゃっほーい！！

そう簡単にいくといいけど。

ブラック・ギルドも動き出してるから、気をつけてよね？

クロガネ：解ってるって！！

ｃｈａｐｔｅｒ　＋０２　交錯する記憶（前書き）

やっと更新ー！　どうもＲｅｎです

クロガネ：今回は何か起きそうだな

といっても３分の２くらいは回想でできてますｗ

さて、第５話スタート！

クロガネ：ぶっ飛ばしていこうぜ！！

chapter ＋02　交錯する記憶

「その壱、まず、余計な物は消すこと。」

ロディ・ピールス三番地

日は既に西の彼方へ沈み去ろうとしていた。
白い家々の壁に、赤い光が一瞬、滲むように煌めき、直ぐに夜を告げる藍色へと染められていく。
此処、三番地は観光地新緑の丘（リーヴ・ヒル）が徒歩１０分の所にあるため、クロ

ック・アースではちょっとした観光名所となっていた。
新緑の丘（リーヴ・ヒル）は、世界で唯一の追憶（メモロイ）の花という植物でできた丘であり、
また、最も古い丘としても知られている。
本来であれば１００万人の観光客で埋め尽くされてしまうはずの広
大な丘が、ここ最近、観光客どころか町民さえも訪れる人はいなく
なっていた。

ブラック・ギルド‘ビシャス・シグナル’

このギルドの再来が、大きな理由の一つと言える。
奴らは、以前にもこの地方に訪れ、メモロイを全て枯らしてしまう
という大罪を犯したギルドである。
そう、今からたった１０年前の話である。
奴らは人質にされ怯えるポケモン達に、自らの野望を話した。
この野望こそ、新緑の丘（リーヴ・ヒル）に誰も来なくなった２つ目の理由・・・

‘悪魔’の復活　　である。

悪魔というのは、このクロック・アースに伝わる伝説に記された、
かつてこの世を闇で覆ったという怪物のことである。
何者かの手によって治まった筈に見えたが、つい最近になって、目
撃者が現れているという。
下手をすればこの世界なんて一撃で倒してしまうだろう。
警察も出回っているとのことだが、恐らく無意味だ。
こんな情報を聞いて、のんびり観光に来る馬鹿は、命を失うであろ
う。

しかしそんなことも知らず、クロガネ達は新緑の丘（リーヴ・ヒル）にやってくるのであった。

「ん～、空気が美味しいわ！　景色も最高だし、来てよかったわね！　でも、なんでこんなに人が少ないのかしら・・・？」

ユリアが草原に勢いよく寝転がった。
ここからは、美しい街、深い蒼に染まる海、さらにはヘヴン・ブリッジまで一望できる。
メモロイの甘い香りが、辺り一面に広がっていく。
ディアンも、その空気をいっぱいに吸い込んだ。
甘酸っぱい、イチゴのような香りが口一杯に広がった。
良い香りに包まれ、ユリアとディアンは一時の幸福に入り浸る。
しかしクロガネだけは、顔を顰めて辺りを見回していた。

「どうしたんだ？　クロガネ？」

ディアンはクロガネの顔を覗き込んだ。
クロガネは「いや・・・」と小さく呟いた。「何だか、見たことあるような気がして。」
ディアンは違和感を感じたが、それ以上は聞かないことにした。
すると、突然向こうから、小さな何かが走ってくるのが見えた。
周りの植物を蹴散らして、勢いよく、真っ直ぐこちらに向かって。
正確には、クロガネに向かって。

「・・・何だ？」

「あんたあああああああああああああっ！！！！」

よく見ると、そいつはオレンジの身体に鶏冠が特徴的なポケモン、ワカシャモだった。
奴は発達した脚を高速に動かして、叫びながら走ってくる。

「誰？」

「さあ・・・」

ワカシャモは大声で叫びながら、クロガネ達の前で、足の急ブレーキをかけると、クロガネの肩をガッシリ掴んで大きく揺さぶった。

「あんた・・・！　もしかして・・・！」

興奮しているのか、周りの景色など目に入っていないらしい。
ワカシャモは少し冷めた表情をしていた。

「っつ、何なんだよ、お前！！」

クロガネは咄嗟に回転し、手を振りほどいた。
ワカシャモは勢いで後ろに2，3歩下がったが、すぐにまたクロガネの目の前にやってくる。
肩が激しく上下している。
ユリアとディアンは顔を見合わせた。

「あんた、覚えてないの？！　ここに倒れてたじゃない！！」

「へ？」

突然の事に、クロガネは驚きを隠せなかったが、同時に確信を持った。

道理で。
オレがこの場所を知っている訳だ。

「どういうこと？」

ユリアが近づいて首を傾げる。
ディアンもワカシャモを見て眉をひそめている。
三人からまじまじと見つめられたワカシャモは、目を逸らすためか、あるいは過去を見つめるためか、真っ青な空を見上げて、静かに話を始めた。

「長い話になるけど・・・」

１０年前　　ロディ・ピールス

彼女、ハーネルは、ただのポケモンにすぎなかった。
永遠に繰り返される、‘破壊’という名の‘日常’。
それだけならよかったのだ。
ただ彼女には・・・・・・犠牲が多すぎた。

新月の夜に現れる、一度は死んだ筈の悪魔。
と、それを目当てに群がるブラック・ギルド。
まるで蜜を求めてやってくる虫のようだった。
結果はいつも同じ。
小さくて弱い者は、次々と潰されていく。
無力な虫が呆気なく人間に捕まってしまうように。

増え続ける犠牲。
それでも奴等は己の野望を抑えきれず、悪魔に向かっていく。
破壊され続ける村。
壊れていく。そう、全て、めちゃくちゃに。

醜い。
彼女はそう思っていた。
死ぬことが解っていて、それでも、欲望のため突き進んでいく。
それは、けっして綺麗な望みではなく。
だから彼女は、奴等への恨みを必死に胸の中で燃やし続けながら、
傍観者として、村の行く末を見守っていた。
だが、そうもいかなくなる。

ロディ・ピールス三番地

頭が真っ白になる。
硬直する身体を、必死に動かしてみる。
身体のあちこちに、赤いものがついている。

家の壁にも、同じものがある。
後ろを振り返ってみると、母が倒れている。父も。
前方からうめき声が聞こえた。
左胸を抑えて、倒れこむ兄。

「お兄ちゃん！！　しっかりしてぇええ！！！！」

彼女は泣くことも忘れ、兄に駆け寄った。
自分をかばってくれた兄を。
そして肩をしっかり支える。
そのとき、彼女は初めて悪魔を見た。
自分より一回り小さい悪魔を――

彼女は、ただの傍観者で居られなくなった。
胸の恨みを、抑えきれなくなった。
そして彼女は、村を破壊するようになる。
生まれつき身体能力が高かった彼女の暴走は、村の誰にも止められなかった。
友達の声も、最早届かない。
もう駄目だ、と、自分の崩落を確信していた彼女だったが・・・・・・・

この言葉に救われる。

「君は、誰も護ることができなかった。・・・それが辛かったんだ

ろ？　だけど、君は強いよ。もうきっと何も失わない。だから、僕と一緒に来てくれないか？　大丈夫だよ、君にはもう・・・」

もう、何も怖いものなんてないから

彼は知っていた。
彼女の暴走が、家族を失った悲しみでも、悪魔への恨みでも、未来への絶望感でもなく・・・
‘自分より小さいもの’への、どうしようもない恐怖だということを。

彼女はこうして、彼が率いるギルドへ入ることになった。
彼の名は、バロック。かつて悪魔を倒し、この町を作り上げたあの‘ケイデン’の子孫だった。
彼女は毎日、村の人々を護り続けた。
悪魔から。ブラック・ギルドから。
敵は数千、数万と存在している。
だが、彼女の実力は、不利な戦いを勝利へと導いていった。
そしていつしか、バロックへ好意を抱くようになる。
恋でも、友情でもなく、単純な、‘尊敬’を。

そして、彼女の入門もあってか、ギルドは全国でも有名なものとなる。

戦いの中に、幸福と、充実感を得るようになった。

そうして、また月日が流れる。

5年後　新緑(リーヴ・ヒル)の丘

「どうして・・・どうして・・・」

左胸を抑え、倒れこむ影。

今度は、彼女は泣くことを忘れなかった。
彼に駆け寄る。
自分をかばってくれた彼を。
そして支えた肩をしっかりと抱き寄せる。
これで2度目の奴の顔を見た。
自分よりも小さすぎる‘悪魔’を、今度は・・・
しっかりと、睨み返した。

しかし、彼女の眼に、ゆっくりと倒れていく悪魔が映る。

「？！」

驚く彼女を見てか、彼が、真っ赤になった口元をわずかに緩める。

「ハハッ・・・最後に一撃、食らわせてやったよ・・・これで相討ちさ・・・」

倒れて、光のように消えていく悪魔。
ふわり、と香るメモロイが憎い。
そして彼の身体も、次第に冷たくなっていった・・・。

彼女は、彼の意思を継いで、ギルドの親方となった。

そうして、また時は経つ。

3年後　　ロディ・ピールス

平和がやっと訪れた筈の村に、不吉なうわさが流れ始める。
悪魔の復活。

彼女は青ざめた。
あのとき、彼が命を賭してまで戦った努力が、無駄になった気がした。
彼が生きていたら、そんなことはない、と微笑むだろう。
だが、彼女は、悪魔に復讐を誓う。

そんな中、新緑の丘（リーヴ・ヒル）で、倒れているポケモンを目撃する。
「しっかり！！　しっかりして！！　あんた、名前は・・・？！」
「く・・・クロ・・・ガネ・・・。」

「思い出した―ッッ！！！！！！！！」

突然クロガネが叫んだ。
すっかり暗くなった夜の村に、その声が響き渡る。
あまりの唐突さに、ユリアたちが飛び上がって驚いた。

「ちょ・・・驚かさないでよ！？」

ユリアがクロガネに怒鳴った。
クロガネは、我に返って頭をかく。

「すまねぇ・・・。でも、あの時、オレが言ったのは、‘クロガネ’じゃなくてさ・・・」

ふわっと、風が良い香りとともに吹き去っていく。
クロガネは、思い出した過去の記憶を話し始めた。

それは、クリスマスイブの夜。
編集長から、コピック画の依頼が水彩画に変更になったのを聞かされた日だった。
締め切りは明日。
急いで書き終わらなければ、今月の収入が大幅に減少する。
そんなことを考えながら、悲鳴を上げる手を懸命に動かして、下書きを完成させる。
いざ着彩、となってから気が付いた。
ブラックの絵の具が、丁度切れていることに。
キャラクターに黒を使用するのに、ブラックがないのではどうしようもない。
買いに行こうと思い、時計を見れば午前2時。
外に出たものの、開いているのはコンビニぐらいだった。

「何てついていないんだ・・・。」

ため息交じりに呟くと、息が凍って白く映った。
足がふらつき、街灯に寄り掛かる。

（疲れたかな・・・）

視界がゆがみ始めた。
微妙に危機感を感じながら、目を擦る。
瞼が重い。
そのまま座り込んだ。
すると不意に、目の前が暗くなり、足音が聞こえる。

足音は自分の前で止まる。
半分も開かなくなった目で見上げると、黒い人影が見えた。
（誰・・・？）
疑問に思いつつも、眠り込んでしまった。

そして、夢に魘された。
依頼絵を完成させることができず、編集長に扱かれる夢。
そして巡っていく無くなった絵の具・・・。

「し・・・かり！！　しっかりして！！　あんた、名前は・・・？」
声がした。
目を開いたら、何かがいるのは確認できた。
しかし、視界が曇ってはっきりしない。
まだ半分夢に侵された脳で、彼女はこう呟いた。

「く・・・黒・・・が無ぇ・・・。」

風が止んだ。
ユリアとハーネルは驚いて声も出ないらしい。
ディアンもしばらく沈黙していたが、言葉の意味を理解したらしく、大爆笑し始めた。

「・・・アハハハハハ！！！　黒が無い？！　それが名前になっちまったってわけだ！」

「そういう・・・ことになるな。」

クロガネは恥ずかしくなって、目を逸らす。
まだ笑うディアンを、ユリアが平手打ちした。

「笑いすぎよ！」

「って・・・痛ぇな、ちょっとは優しくしてよ。」

ディアンが頬をさすった。

「でも・・・勘違いしたアタイが悪かった。御免。」

ハーネルが頭を下げた。

クロガネは驚いて目を見開き、あわてて両手を左右に強く振った。

「気にすんなって！　オレもこの名前、気に入ってるし。でも、流石に昔の名前までは思い出せなかったぜ・・・。」

クロガネが首を傾げた。

そのときだった。

「見ーつけた♪」

それは、突然背後から聞こえてきた。

「なっ・・・・！」
「あ？」
「！！」
「！」

「『拡散毒』っとお！！」

『ヘドロウェーブ』より強力な毒が、衝撃波となって襲ってくる。
振り返る暇さえない。
死角から襲ってきた攻撃を躱せたのは、ユリアとハーネルだけだった。

「くあっ？！」

躱そうとジャンプしたものの、脚に食らってしまったクロガネは、
酸を浴びたような痛みを覚えた。

「くっ！」

ディアンは腹に食らった傷を自らの炎で焼く。
焦げ臭い臭いとメモロイの甘い香り、そして毒の臭いが混ざり合い、
異様な雰囲気を作り出す。

「ブラック・ギルドね・・・。」

ユリアが呟いた。
クロガネも攻撃を仕掛けてきた奴を見つめる。
青い体に赤い毒袋が特徴の、ドクロッグだ。

「あれれー？　見つけたと思ったのになー。居ないなー。」

奴は首を傾げて不気味に笑う。

「（何が目的だ・・・？）」

「まあいっか。食っちゃおーっと♪」

ディアンに向かって勢いよく飛び上がった。
そう、‘飛び’上がったのだ。
恐ろしいほど高く飛び上がると、音速の如く落下する。
突き出した毒を纏う腕が、ディアンの頭上に突き刺さると思われた。

だが、ディアンは受け止めた。
素手ではない。
黒い炎を纏った刀で。

「刀・・・？」

クロガネは目を疑った。
ディアンは鞘らしいものすら持っていなかったのだ。
一体何処から刀を出したのだろう？

「ディアン！　もしかして・・・！」

ユリアが叫んだ。
腕を受け止めながら、ディアンはユリアたちの方を見て笑う。
「こいつを使わなきゃ、止めらんねぇと思ってな。」

「どういうことだ？！」

クロガネはユリアの方を見る。
そうしている間に、ドクロッグが次の攻撃を仕掛けた。
しかしまたディアンが受け止め、黒い火花が散る。
ユリアはそんな彼らから目を離さないまま、クロガネの問いに答えた。

「貴女には話してないんだっけ・・・？　いい、この世界のポケモンは、おそらく貴女も含めて覚醒（ポテンシャル）・・・つまり能力を持ってるんだけど・・・ディアンの能力は・・・。」

「俺の覚醒（ポテンシャル）は・・・‘黒の魂（ブラック・ソウル）’だ！！」

ディアンが宣戦布告とばかりに漆黒の刀を振り上げた。

ｃｈａｐｔｅｒ　＋０２　交錯する記憶（後書き）

今回は黒的な言葉が多かったですね；

クロガネ：オレの過去が・・・って早くね？！

ユリア：にしても名前の由来には驚きだわ

ディアン：いつ聞いても爆笑だぜ！　アハハハハ！！

ユリア：呆れた。まだ笑ってるわ。

クロガネ：にしても黒ギルドの野郎、ついに動き出したな・・・！

次回はバトルになりますね♪

そしてディアンの能力にも注目ですよ！

ｃｈａｐｔｅｒ　＋０３　覚醒する正と悪（前書き）

どうもＲｅｎです
今回は戦闘シーンですよ！

ユリア：ってか作者どんだけ暇人なの？！　一日で２話も書くなんて！

失礼な！　ストックがあっただけです

それでは第６話、スタートです！

クロガネ：そういえば真面目な戦闘シーンはこれが初めてだよな・・・

chapter ＋03　覚醒する正と悪

「面白くなってきたよーっと！　『毒突き』！」

「食らうかよ！　『火炎魔神（バーニングヒート）』！！」

ディアンの一振りを紙一重で躱し、次の体制をとる2匹。
ドクロッグが突き出した腕と、黒い刀がクロスし、火花が散った。
だがすっかり暗くなった夜の空間に、その黒い火花はあまりにも目立たなかった。
無論漆黒の刀も。
ディアンはその‘保護色（カムフラージュ）’をうまく利用していた。

「厄介だなあ、その覚醒（ポテンシャル）・・・。何？　素敵な今宵に黒い刀をブンブン振り回して血祭りならぬ黒祭りにしよーぜ的な？」

「訳がわかんねぇ事をベラベラしゃべんなよ・・・斬るぜ？」

ディアンが刀を振る。
勢いでドクロッグは後ろへ吹き飛ばされた。
好機とばかりにディアンが走り寄り、刀を振り上げる。

「『心火の陣（ヒートアクセル）』！！」

しかしドクロッグは宙に浮いた状態から身を翻し、ディアンの右腕を真上からつかんだ。

着地と同時にその腕を捻りあげる。

「うっ・・・？！」

ゴキリ、と音がして、右腕に痛みが走る。
ディアンは慌てて捕まれた手を振り解こうと下に勢いよく腕を下す。
あっさりと手は解けたものの、右手に力がうまく入らない。
刀を左のみで持ち、体制を立て直す。

「やるな・・・」

「手前が弱いだけだと思うんだけど？」

ドクロッグは相変わらずクククと笑っている。

遠方から、クロガネは微妙に危機感を感じていた。
先ほどから違和感は感じていたのだが、敵が隠し玉を持っていることに気付いたからだ。
奴は、片腕だけで戦っている。
そしてもう一つの腕の掌の中には・・・
ナイフが、握りこまれていた。

「奴の能力と関係しているのは間違いなさそうだわ・・・。」

ユリアも気付いたのか、目をスゥ、と細めて呟いた。

「ディアンは・・・」

「ああ、彼のことなら心配しなくても良さそうよ。なんせ、‘追い詰められれば追い詰められるほど強くなる’能力ですもの・・・。」

不安をあっさり切り捨てられ、苦笑するクロガネ。

だがユリアはまだ考え込んでいる。

「アタイ、村のみんなに忠告してくる！」

「頼むわ。」

いつの間にかユリアが司令塔になっていた。

あれ？

不意にクロガネは、ユリアの背後に人(ポケモン)を見た。

「ユリア・・・後ろッ！！！」

「え・・・？」

「よそ見ですか？　それとも私が小さすぎて見えませんでしたか？・・・まあいいです。影が薄いって悪いことばっかりじゃありませんからね！　それじゃあ『厄災の種』～、えいやっ！」

後ろにいたのは、赤い甲羅と黄色いからだが特徴のツボツボだった。

ツボツボは手に持っていた種をユリアに投げつける。

同時に飛び跳ねて距離を取った。

種がユリアの額にヒットする。と、同時に、種がそのままユリアの額に入り込んだ。

「？！」

「しまっ・・・。」

ユリアが突然倒れた。
メモロイの花びらが一斉に散る。
ユリアは人形のような動きで、ツボツボに顔を向けようとする。

「な、何これ・・・？」

「は～い、貴女は今から私のお人形さんです！　ほらほらそんなとこで寝てないで立ってー！！」

「立て」という言葉が出た瞬間、ユリアがバネのような動きで立ち上がる。
何処かの関節が痛む音がした。

「ぐっ・・・！」

「手前・・・っ！」

クロガネはたまらずツボツボへ急接近し、シンプルに、右ストレート，を食らわせる。
ツボツボは綺麗な回転をしながら数十メートル吹き飛ばされた。

「な・・・なんてパワー何ですか・・・私はか弱い乙女ではありませんが、肉体勝負には無理がありますよう・・・。」

「オレはそのか弱い乙女ですが何かってんだ！！」

若干、格差言葉を言われたクロガネは、キレつつもさらに右脚を軸にしたハイキックを顔面にかました。

「ぐぼっ！」

「（いつもより筋力が上がっているような・・・？　気のせいか・・・？）」

ツボツボはゆっくりを頭を上げると、鼻を押さえた。
押さえた手の隙間から、赤い滴がしたたり落ちる。

「なんて馬鹿力なんですか・・・、そこのゴチミルさん、どうにかしてくださいよ・・・。」

ツボツボがクロガネの背後を見ながら話す。
声もか細くなっていた。

「は？　ユリアを・・・」

ユリアを馬鹿にしてんのか、という言葉を、クロガネは最後まで言い切ることが出来なかった。
背後に、肘打ちを構えたユリアの姿が見えたからだ。

「ユリ・・・ゴフッ！！」

振り返ろうとしたクロガネの頬に、鋭い肘が突き刺さった。
口と鼻から空気が漏れだす。

一瞬、クロガネの眼に景色が逆さまに映った。
肘打ちの反動で飛んだと思ったが、違ったようだ。

（サイコキネシス・・・？！）

そのまま地面に叩き付けられた。
小石が背中に食い込み、痛みが走る。
痛みに耐えながら上半身だけを起こして、ユリアを見た。

「こいつは・・・ユリアじゃない・・・ユリアの眼をしていない・・・、こいつは・・・」

「ただの、操り人形だ！」

「ユリア・・・？！　っと！」

「よそ見してる場合？　殺っちゃうぜ？」

「殺ってみろよ！」

ディアンが片手のみの力で相手の胴目掛けて刀を振った。
躱そうとしたドクロッグの腹を、刀の先が掠る。

「くっ・・・！」

身を翻し着地するが、ドクロッグは腹部を押さえて片膝をついた。
ディアンもゆっくりと着地し、刀を構えた。
ディアンの身体にはいくつもの傷跡が残っており、戦いの激しさを示している。
だが、彼は顔に余裕からなのか笑みを浮かべ、構えた刀を肩に預けた。

「どうだ？　斬られた感じはよォ？」

「・・・・・結構痛むねェ。何でかな？」

ドクロッグが顔を引きつらせて笑った。
腹部を押さえたまま、ゆらゆらと立ち上がる。

「そうだろうよ、この黒炎で作った‘焔’での傷は、細胞を焼くからな。」

ゆっくりと刀、‘焔’を振りながら、一歩一歩近づいていくディアン。
それに合わせて、ドクロッグも一歩一歩後退りをする。

「お前の・・・なんだ、その一回当てるだけで死ぬ毒を送るナイフってのも、当てなきゃ意味ねぇしなあ・・・？」

「当てたはずなんだけどな・・・手前が傷つかねぇから毒が回らないんだ。」

「そりゃそうだ！　俺の能力は、一撃で俺を殺す技を受け付けねぇ。だからって，みねうち，ばかりしてるとどんどん身体能力が上がってくもんだから、ギルドじゃウザがられてるよ。」

「・・・それは残念だね。」

「ああ・・・俺も残念だ・・・。」

瞳がギラリと光る。
ディアンの焔が、真上に振り上げられた。
月光に反射され、白い光を放つ。

「こんな簡単に、決着（ケリ）が着いちまうなんてよ！！！」

（『心火の陣（バーニングアクセル）　強』！！！）

黒い竜の形となった‘焔’が、ドクロッグの頭上にヒットする。

「・・・ふぅ。さて、毒袋野郎もやっつけた事だし、ユリアを助けに行くか！」

すっかり炎に包まれた‘敵’に背を向け、ユリアの方へ歩み始めるディアン。
安堵のため息をつく彼は、忍び寄る背後の存在に気付けなかった。

「・・・？！！！！」

背中に衝撃が走り、声にならない悲鳴を上げるディアン。
そのまま崩れ落ちるように倒れこむ。
そして、炎を背後に、ドラピオンが立っていた。

「おい、時間が掛りすぎているぞ、ジア？」
怒り交じりの低い声で、後ろのドクロッグに言い放つ。
ドクロッグは乾燥肌で痛んだ身体を不自然にくねらせながら、炎から脱出する。
「んな事言われたって～、居ないじゃないッスかぁ～、悪魔なんて。」
痛そうに歩いてくるジアを横目で見ながら、ブラック・ギルド‘ビシャス・シグナル’の親方は呟いた。
「いや、間違いねぇ此処にいる。感じないか？　凄まじいエネルギーを。案外姿隠してるだけですぐ隣にいるのかもしれねぇ。」
ジアはその言葉に辺りを見回してみるが、気配らしきものは感じなかった。
「（ボスと俺じゃあ格が違いすぎるか・・・）」
「あっ！　ボス―！！！！！」
遠くから小さい影が手を振っているのが見えた。
「コークか・・・またあいつ、‘人形’作ったのか。」
ジアは呆れて首を振った。
その途端、首の後ろの皮膚が痛み、「うっ！！」と、飛び上がるのだった。

「（ボス・・・だと？！）」

クロガネはユリアから目を離さないように間合いを取りながら、横目でツボツボが合図した方向を見た。横たわるディアンの姿。
そして燃え上がる炎。
ドラピオン。
それぞれのキーワードが意味を成し、クロガネを不安に陥れる。

「ディアン！！！！！！」

クロガネは脳で結論を見出す前に、駆け出していた。
叫び声を聞いて、コークがクロガネを見る。

「あれ？　・・・まあいいや。ボスのところへ行ったとして、勝てる保証は全くないですからね。」

彼は止めなかった。脱力するように息を吐く。
まるで、戦いの決着でも着いたように。
彼は、ユリアに最後の命令を下す。

「君のその左胸・・・自分で一刺ししてください。」

「おや？　可愛い小僧が一人、駆け下りてくるぜ・・・」
ジアが笑いながら呟いた。
ドラピオンもその方向を見る。
「あれは小僧じゃなくて嬢ちゃんだな・・・。ま、可愛い嬢ちゃんに、説教でもしてくるか・・・。」
「ハハッ！　流石ボスだ！」
ドラピオンは不敵な笑みを浮かべる。
勢いよく地面を蹴ると、その巨漢を宙に浮かせた。
夜空の中、その姿は月に浮かんで不気味な存在と化す。
「嬢ちゃん、説教だ。優しい優しい、フフ、説教をな。」
「！！」
クロガネの目の前に、突然ドラピオンが落下してくる。
バックステップで間合いを取るクロガネを見て、ドラピオンは「ほお・・・」と感嘆の声を上げた。

ズシン、と音がして、僅かに地面が揺れる。

「お前が・・・ボスか・・・！」

尻尾を立てて威嚇体制をとるクロガネ。
ドラピオンは両肩を準備体操とでもいうように上下させて、両腕を振り上げた。
傷跡の残る爪が、月の光に照らされた。
依頼書からは解らなかった、‘ボス’の威圧感がひしひしと伝わってくるのを、クロガネは感じていた。

「（万年筆なしで戦えるかどうかわからねぇ・・・）」

退くも勇気という言葉が脳内に浮かんでくる。
それでもクロガネは、逃げる気はなかった。倒れている仲間を、見捨ててはいけなかった。

「お嬢ちゃん、まだ若いうちからの夜遊びはいけないなぁ、俺が教育をしてあげようか。」

冗談などではないことは解っている。
奴は笑っているが、確実に本気だった。
威嚇ばかりして仕掛けないクロガネに、毒爪が飛んでくる。

「お説教の始まり始まり～♪」

まるで‘殺し合い’を楽しんでいるかのような声。
クロガネはそれを紙一重で躱し、尻尾で相手を叩き付けようと試みた。
奴の身体の動きを見極め、タイミングを見計らう。

「背中がガら空きだ！！」

「・・・お？　嬢ちゃんも可愛いもんだねぇ、そんな攻撃で俺を襲おうなんて♪」

目の前からドラピオンが消えた。
背中に走る鋭い衝撃。
一瞬、頭が真っ白になる。
クロガネは、何が起こったのか理解できなかった。
ただ、夜空の星屑が回る、廻る、廻る。

投げ飛ばされた・・・？

気付いた時には、正面にドラピオンが構えていた。
十字のようにクロスさせた爪が、毒を帯びて紫色に怪しく灯る。

「もうちょっと楽しませてくれよォ！！　『クロスポイズン』！！！」

これはマズイ！！！！
クロガネは本能的に焦りを感じた。
ドラピオンが降下して襲ってくる。

「・・・っ！！！」

クロガネは間一髪、尻尾で体の向きを変え、当たる寸前に回転をし

て躱した。
しかしその後、ドラピオンの尻尾の爪がクロガネの腕を掠めたのだが。

「っつ・・・！」

クロガネは痛む掠った右腕を見た。
傷口が痛むのではない。
腕そのものが痛みを感じるのだ。
筋肉痛でも、打撲でもない。
グジグジ、と奇妙な音を立てる。

「（何なんだ・・・？）」

しきりに腕を見つめるクロガネに、ドラピオンは首を傾げた。

「おや・・・？　困ったねぇ、嬢ちゃんにはなるべく怪我させないように終わらせようと思っていたんだけど・・・。」

終わらせる、という言葉に、クロガネがドラピオンを睨みつける。

「おうおう、可愛い嬢ちゃんがそんな怖い顔しちゃ駄目だぜ？　でも、そんなに早く終わらせたいんなら、ご希望にお答えすることにしよう・・・。」

ドラピオンが両腕を振り上げ、口元に集める。
その口元にオレンジのエネルギー体が突如現れ、徐々に大きさを増していく。

「破壊・・・光線・・・？」

クロガネはよく聞く技名を口にする。
呆然と立ち尽くす間にも、エネルギー体は大きくなっていく。
すると突然、背後から声が聞こえた。

「そんな可愛いもんじゃねぇよ、この技は。」

「は？」

先程のドクロッグが、少し盛り上がった丘の上に立っていた。
クロガネに話しながらドクロッグは、太陽のように大きく、輝き始めたエネルギー体を眩しそうに眼を細めながら見ていた。

「こいつは、自分の中の野望によって強くなる技だ。昔、悪魔が使っていたらしくてよ、ローズクオーツの力でボスも習得しちまった。お前、これ受けたら死ぬぜ？」

クロガネは唾を飲み込んだ。
自分が死ぬどころか、これだとこの丘も壊滅し兼ねない。

（ユリアも、ディアンも死んでしまうかもしれない・・・。）

もっとも、その間にユリアは己の左胸を刺して倒れていたのだが。

ジグ。

突然、腕に痛みが走った。

あのときの痛みだ。慌てて右腕を抑え込む。

だが、比べものにならない痛みが襲ってきた。腕が火のように熱い。

ドラピオンのエネルギー体と呼応しているかのようにも思えた。

クロガネは痛みで身動きが取れない状態に陥った。

「これで終わりだあッッ！！！！！！！！！　『魔王の咆哮（ヴァイオレットチェックメイト）』

！！！！！」

「（くっ・・・ここまで・・・なのか・・・？！！）」

クロガネは、動かなかった。

頑張ろうと思えば動けたのだ。だが、敢えて何もしなかった。

昼間のような明るさと、壮大な爆発音が新緑の丘（リーヴ・ヒル）を包んだ。

「ふはぁ、終わったか。」

ドラピオンが呟く。少し体力を使ったのか、肩が上下していた。
辺りは黒煙に覆われて見えなかったが、相手の死を確信した。
これで生きていたものは今までで‘悪魔’のみだったからだ。

「まだ奴の気配があるな・・・よし、探すか・・・。」

「そうッスね。」

ドラピオン達が立ち去ろうとすると、少し黒煙が晴れた。
晴れた視界の隅、そこにディアンとユリアが倒れている。
ジアとコークは、二人を見つめ眉を寄せた。

（焼けなかったのか・・・こいつ等・・・。）

足元のメモロイは、全て枯れていた。
ジアたちも、それぞれ強力なバリアをはってこの技に耐えた。
それでも傷が残っているのだ。
バリアどころか何の抵抗もしていない彼らが、火傷一つ残っていな

いことに疑問を抱きつつも、前へと歩んでいく。

（いや待てよ、気配はこっちから・・・。）

ドラピオンが振り返ったその瞬間だった。
黒煙の中に、ユラリ、と立ち上がる影が見えた。
2本の立った耳に、ギザギザの尻尾。

「？！」

紛れもなく、さっきのピカチュウ。

何故、立っている？

ドラピオンの頭は混乱してきていた。
すると、煙の向こうの人物（ポケモン）が、こちらに話しかけてきた。

「今のは結構美味かったな・・・。だがまだ足りんぞ、クズめが。」

「は？」

驚いて、声も出なかった。
なぜなら、その影はか弱いお嬢でも、ピカチュウでもなく・・・・・・

漆黒の、‘悪魔’だったからだ。

クロガネは、何が起きたのか理解できなかった。
おかしな事に無傷、そして自分が勝手に喋っている。
逆に自分は喋ることはおろか、指先ひとつ動かすこともできない。

「このピカチュウの覚醒(ポテンシャル)を教えておいてやろう・・・・。‘正の悪(ジャスティス)’ってな・・・、まあ野望のでかい奴から邪悪なエネルギーだけを吸い取って、パワーアップするのさ。最も、それは私の能力の一部であってこいつの物とは言い難いがな。」

自分が放つ言葉に驚くクロガネ。
何故自分も知らない覚醒(ポテンシャル)を知っているのだ？
そして一つの結論に辿り着く。

自分の中に・・・悪魔が存在していると。

あるいは、悪魔の中に自分がいたのかもしれない。
だが、そんな事はどうでもよかった。
精神空間の中で、クロガネは必死にもがいた。

（早く戻らないと・・・取り返しのつかない事になる・・・！）

「さあ、手前等、殺される覚悟ぐらいは持っているだろうな・・・？」

楽しそうに楽しそうに、悪魔が微笑みかける。
まるで、盤上の上でゲームが始まったとでもいうように・・・

ｃｈａｐｔｅｒ　＋０３　覚醒する正と悪（後書き）

クロガネ：どうなっちゃったんだオレはあああああ？！

はい、大変な事になりましたね

クロガネ：ってか此処、オレしか居ない？！

そうして誰もいなくなった・・・

クロガネ：不吉なことを言うなあ！！！

ｇｄｇｄになりましたね、今回ｏｒｚ

次回はクロガネならぬ悪魔のバトルですｗ

ｃｈａｐｔｅｒ　＋０４　絶望と希望（前書き）

はい、改名したＲｅｎこと奈倉です！！

クロガネ：どうでもいいんだが（汗

まあそう言わずに・・・

今回は悪魔の実力をしっかりと堪能くださいませ☆

chapter ＋04　絶望と希望

ドラピオンは何が起こったのか解らなかった。
頭が混乱しすぎた。
判断力が鈍った脳で、彼は次の行動をとる。
懐から桃色の結晶体を取り出すと、己の前に翳して体力を回復させる。
周囲にいたジアとコークの体力も回復していた。

「ほぅ、ローズクオーツか。面白いものを持っているんだな、お前は。」

クロガネ、いや、悪魔が興味深そうに言う。
ジアとコークがそれぞれ‘ボス’のサイドに着いた。

（一匹じゃあ確実に殺られる・・・。ここはとりあえずコークの技をメインに行くか・・・。）

コークの覚醒（ポテンシャル）、‘種蒔き’さえ上手く活用できれば、何とか状況は良い方向に向かうだろう。
そしてこの‘ローズクオーツ’を利用すれば、パワーは最大限に活かせる筈だ。
ドラピオンは状況を飲み込み始めた脳で、流石親方格という程のス

ピードで作戦を練り上げた。
悪魔の周りをまわりながら、ジリジリと距離を縮めていく。
悪魔もそれに合わせるように体の向きを合わせていく。
メリーゴーランドのような体制になった中で、先にドラピオンが仕掛けた。

「悪魔だろうが恐れはないぜ！！　『十字蛇口』！！」

クロスさせた腕から、蛇のようになった黒い‘影’が、現れた。
蛇は口を大きく開けて渦の中心となっている悪魔へ一直線に飛んでくる。
悪魔はそれを見て一言、「不味そうだな」と呟き、さけた口を大きく開けて蛇を飲み込んだ。

「・・・・・・。」

ドラピオンは自分の技が食べられたというのに対して驚きもせず、ジアに目で合図を送る。
ボスの行動に気付いたジアは、悪魔のもとに駆け出して行った。
まだ‘食事’の済んでいない悪魔は、ジアの行動に気付いたのか、蛇を途中で噛みきり、腕を構えて向かってくるジアの方を向く。
噛み切られた巨大な蛇は、体液の代わりに影を傷口から吐きながら、ズシンと枯れたメモロイの上に落ちた。

近づいたジアの掌には、ナイフが握りこまれていた。
ナイフを振りまわしながら、ジリジリと距離を縮めていくジア。悪魔は、口を歪ませて笑いながらステップを踏み、一振り一振りを綺麗に躱していく。
行動から見て、流石にこのナイフの一撃は怖いらしい。
確信をしたジアは、さらにナイフを振り回す。そしていつもより倍

の量の‘猛毒’を、爪からナイフに流し込む。
あまりの量に、ナイフから毒が散り、悪魔の腹部に命中する。
ジュ、と音が鳴り、命中した部分が溶かされた。

「・・・お？」

「（ぐあああああああああああああ！！！！！！！！！！）」

悪魔ではなく、精神世界のクロガネが悲鳴を上げた。
クロガネの腹部に激痛が走る。

「（ハァハァ・・・どうして・・・オレの方にダメージが・・・来たんだ・・・？　やっぱり、オレが本体だからなのか・・・？）」

腹部を押さえ、クロガネが倒れこむ。
身体がほのかに熱い。恐らく毒の副作用だろう。
苦しむクロガネの声を唯一聞くことが出来る悪魔は、「チッ」と舌打ちをして、ジアを睨みつける。

「どうやら戦いを楽しむ余裕はなさそうだな。私は何とも無くても‘器’の方がこれでは持たない。」

「？」

ジアが異変に気付いた。
いきなり悪魔が片手を振り上げたのだ。
振り上げた黄色い腕が、黒く染まっていく。

「・・・・・・そういえば、お前達は私の事を‘悪魔’と呼んでいるようだが・・・私にもちゃんとした名前がある。・・・ガロウと

いう名がな。」

ガロウと名乗った悪魔の身体、それは最早、ピカチュウ、ではなかった。
足の先まで漆黒に染まってしまうクロガネの身体。
反対に、黒く澄んだ瞳は爛々と赤く輝きだす。
ニタリ。笑う口元からは、白い口内が覗いていた。
遠方から見ていたドラピオンは、その様子を見て目を細めた。

「何をした？」

「・・・何をしたか？　フフ。此奴の身体と私の身体を隔離させた。まぁ、制限時間（タイムリミット）があるが、それまでに終わらせればいい話だ。」

隔離――

それはつまり、ガロウの本気を示していた。
奴は一時的に、クロガネ、という鎖（リミッター）から完全に解放され、力を最大限に引き出そうとしている。

「久々にこの姿に戻れた・・・・・・。どれ、試に一発。」
「？！」

ガロウは怪しい笑みを浮かべながらそう呟くと、まだ星が煌めいている夜空を見た。
その背中に黒い翼が出現する。
やがて大きく前後に翼は動き、ガロウの身体が宙に浮き始めた。

「・・・？！　空も飛べるのか？！」

ジアが驚いて一歩後退りをする。
ガロウはどんどん高度を上げ、ヘブン・ブリッジの頂上よりも高く昇って行った。

「いい眺めだ・・・、さて、まずは何処にしようかな？　村の方でも私にとっては問題ないな・・・、綺麗な景色を壊すのも楽しいかもな。」

ガロウは高らかに笑い声をあげ、ロディ・ピールスを見下ろした。
夜の街灯に家々の壁が彩られ、まるで蛍を解き放ったかのように輝く村。
ガロウはその景色を見つめ笑いながら、何の躊躇いもなく手を振りかざす。

「（まさか・・・ッ！！！！！　爆破させる気・・・だと・・・？！！！！　やめろ！！！！！！！！！　やめてくれぇぇぇぇぇぇぇぇッッ！！　あの村には・・・ハーネルや・・・ハーネルが守ろうとしたモノがあるんだ！！！！！）」

ガロウの‘器’であるクロガネは、ガロウの次の思考をいち早く読み取った。
奴は腕からエネルギー体を発生させ、この村を焼こうと考えているのだ。クロガネは、脳裏にハーネルを思い浮かべながら叫んだ。
しかし。

「黙れ。ピカチュウ如きに止められる私ではない。」

ガロウはそう呟きながら、自分の尻尾を己の手で千切り取った。……

「（ぐあああああああああああああああああああッッッ？？？！！！！！）」

クロガネは尻尾から激しい痛みを感じ、誰にも届かない断末魔をあげる。最も、彼女にとっては‘激しい’処の痛みではないのだが。猛毒と激痛に襲われ、クロガネは見も心もズタズタに切り裂かれていた。

「それでは、血祭りといきますか♪」

ビュン。
ガロウが、翳した手を横に一振りした。
まるで、空に『一』と描くように。
それだけだった。

突如、町の中央に黒い影が出現する。
ブラックホール、と言った方がいいかもしれない。
空に浮いたその物体は、静かに、少しずつ大きさを増していった。

「マズイ、逃げろ！！！！！」

ドラピオンが叫ぶ。

「もう、遅い！」

ガロウが声を上げた。
物体が一気に縮小し、爆破する。

・・！！！

音にならない爆発音が、辺りを襲う。

瞳を焼くほどの光が、辺りを襲った。
クロガネは、痛みに耐えながら目の前の光景を見ようとする。

光が収まった後に、クロガネは、‘無’を見た。

本当に何も無いのだ。
ただ、丁度町が広がっていた辺りが、真っ黒に染められている。
正しく言えば、染められたのではなく、空間ごと消え去っていた。
低地になった村があった空間に、海が流れ込む。
流れ込んだ海は、混ざり合うかのように、黒い空間に落ちていく。
その海水を見ながら、クロガネはさらに恐ろしい事実を目にする。

その海水の流れ込んだ向こう側は、紛れもなく、‘宇宙’だった。

内側に存在するはずの‘マントル’や、‘核’まで、綺麗に無くなっていた。

「参ったなあ、地面や地球の核ぐらいは耐えてくれると思ったんだが・・・まさか全て塵になって消えうせようとはな。」

ガロウの言葉に、クロガネは更に驚愕した。
これは、空間移動などという技ではない。
パンチやキックと同じ、物理技だと言うのだ。

つまり、先程の一振り、アレだけで地球一つ分を飛ばしてしまったのだ。
恐らく、あの時発生した‘ブラックホール’は、ガロウの一撃によって発生した空間の歪みだと思われた。

「調子がいい理由が解った・・・。‘ローズクオーツ’だ・・・。
此奴の御蔭で力量が倍になっているのか・・・。」

ガロウが呟いた。
その手には、ドラピオンが持っていた筈の桃色の水晶が握られている。

「私のパワーに引かれて自らやってくるとは・・・フフフ・・・。」

「（やめて・・・くれ・・・・・・。頼む・・・・・・・から・・・。）」

クロガネは、痛みに耐えながら、‘悪魔’に祈った。
恐ろしいほどに無力。

目の前に広がる、信じられない光景。
悪夢だと思いたかった。悪夢としか、言い様が無いと思い込ませた。
しかし、全身の痛みが現実へと引きずり込む。
独りになった孤独感が、クロガネの胸に襲ってきた。
（オレのせいだ・・・。オレのせいで・・・みんなが・・・みんなが・・・・・・。）
ガロウは破壊を楽しんでいるらしく、「次は何処にしようか」と呟いている。

最後は、どうなる？
このまま破壊を続けたら、オレも、殺されてしまうのか・・・？

絶望と、不安に体が襲われていく。
ハーネルの気持ちが、理解できた気がした。
何もかも失った孤独感と、未来に対する絶望感。
まるで本でも読んでいるかの出来事。
何も出来ない、無力者。それが、クロガネに課せられたどうしようもない事実だった。

ただ・・・事実は、それだけで終わっていなかった。

「やれやれ・・・キミ、いくらなんでも殺り過ぎなんじゃないかな？」

目の前から声が聞こえた。
クロガネは顔を上げる。
そこに見えたのは・・・一匹の、ポケモン。

「俺の名前は、クロム。」

それは、青と黒の体が特徴の・・・

「キミを、止めに来たよ。いや、正確にはクロガネ、キミを助けに来た・・・って言った方が正しいかな？」

一匹の、ルカリオだった。

ｃｈａｐｔｅｒ　＋０４　絶望と希望（後書き）

さあ、ぶっ飛びましたよｗいろんな意味で

クロガネ：いやいや「ｗ」じゃないだろ！！！　第一章で地球を滅ぼすノベルなんて聞いたこともないぞ？！

クロム：俺の存在には気づかないんだね・・・

あ、謎の救世主（？）

クロム：全く酷いなぁ、折角助けに来てあげたんだけど、帰ってもいいんだよ？

クロガネ：何ていうか、謎だらけだよ、手前・・・。

さて、この謎のルカリオは一体何者？！

そして、ギルド狩りの結末は？！

次回、ｃｈａｐｔｅｒ　＋０５「真実」お楽しみに！

chapter ＋05　真実（前書き）

久々です！奈倉です

クロガネ：遅ぇぞ作者？

御免なさい…

まあそれは置いといて！

クロガネ：あ？

今回はタイトル通り色々な‘真実’が語られます！

お楽しみくださいな♪

クロガネ：かなりgdgdだがな

chapter +05　真実

「俺の名前は、クロム。」

「キミを、止めに来たよ。いや、正確にはクロガネ、キミを助けに来た・・・って言った方が正しいかな？」

目の前に現れたのは、笑顔。
満面の笑みを浮かべる、ルカリオだった。

クロガネは目の前の光景に、何度も目を擦った。
有り得ない事に、ルカリオが・・・

「（宙に・・・浮いている？！）」

クロガネが身を乗り出そうとすると、全身に痛みが襲う。
毒の作用もまだ続いているが、手足の痺れだけで済んでいるのは幸いだった。
必死に腕を立てて何とか這い上がる。

「何者だ？」

ガロウが鋭い声を放つ。
威圧感に圧されそうな声だったが、クロムは調子を崩さなかった。

「はあ・・・何度も言わせないでくれよ・・・クロムって名乗ったじゃないか・・・？」

クロムは肩をすくめてため息をついた。
その様子にガロウが目を細める。
機嫌を損ねたらしい、というのは言うまでもない。

「そんな事を聞いているのではない！！！！！」

ガロウの手から突然、衝撃波のようなものが発生し、クロムの左胸をピンポイントで襲いかかってきた。
当たれば死は確実・・・という攻撃を、クロムはあっさりと躱す。

「・・・困ったなぁ、俺みたいな素人に不意打ちはやめてよね？」
「今の攻撃を躱した時点でお前は素人ではない。」

そう言うとガロウは‘瞬間移動’をしてクロムの懐に飛び込んだ。
瞬時に腕を突出し、胸元に突きつける。

「？！」

一秒にも満たない間に近距離攻撃を仕掛けられ、クロムは怯んで対応が出来なかった。
それが致命傷となり、攻撃を食らったクロムの腹に穴が開いた。

「っ・・・！！！！」

口から空気を吐き出し、仰け反るクロム。
僅かに明るくなり始めた空から、浮いていたクロムの身体が落ちていく・・・。

「なーんてね♪」

仰け反った状態から、いきなり身体を起こすクロム。
穴が開いた腹部が、物凄い勢いで回復していく。

「この能力がなかったら俺、今頃死んでたなぁ・・・、ま、あんたと俺が戦っても俺が負けるのは目に見えて解っているわけだからさ、ここは話し合おうよ？」

物騒なことを口にしながら、それでも笑顔を崩さないクロム。
強がっているようにも見えない。ガロウも奇妙な感覚を覚えたのか、それ以上攻撃を加えることはなかった。

「（良かった・・・このクロムって奴が助かって・・・。）」

クロガネは安堵していた。
これ以上、犠牲が増え続けるのはたまらなかったからかもしれない。

「あんたの中のクロガネちゃん、村のみんなの事を心配してるみた

いだけど、安心していいよ。」
「（・・・！？）」
クロムが突然、クロガネに話しかけてきた。
思考を読み取られ、一瞬驚くクロガネだったが、ルカリオは波導を読み取る種族だということを思い出し、少し警戒を解く。
「村のみんなは、今、俺が管理してる。」
「（管理・・・？）」
「そう。俺が創り出した空間の中でね。ほら、彼らだよ。」
そういうとクロムの隣に窓のような物が出現し、中から真っ白な空間が覗いた。
真っ白な空間の中に、沢山のポケモンの姿が見えた。
恐らく村の住民だろう。そして、その中に、ドラピオン達の姿があった。気絶しているようだった。
「（ハーネル！！！！！）」
さらにその中に、傷ついたディアンとユリアを抱えるハーネルの姿もあった。こちらには気付いていないらしく、二人の看病に汗を流していた。

ハーネルの腕に、傷がちらりと見えた。僅かだが赤く血が滴っており、痛みに耐えているのか時々ハーネルの顔も歪んでいた。

「（ハーネルまで傷つけてしまったのか…オレは…）」

痺れが残る拳を握りしめた。

悔しかった。

ただ自分が只管に弱いことが、悔しくて、悔しくてしょうがなかった。

「いやあ、キミの行動は素晴らしかったねぇ。尊敬に値するよ。」

クロムが微笑しながらクロガネを見た。

正確にはガロウを見つめただけなのだが、その言葉自体は間違いなくクロガネへの物だった。

「（どういう意味だ？）」

「ポルギアスの『魔王の咆哮（ヴァイオレットチェックメイト）』をわざと受けて被害を最小限に食い止め、さらに悪魔の能力を利用してその被害から仲間を護った…。あれは紛れもない、キミが無意識のうちに行っていた行動なんだよ？」

「（ッ！？）」

クロガネは驚きを隠せないとでもいうように、目を見開いた。

あの時、ドラピオン・・いや、クロム曰くポルギアスの攻撃を受け

たとき、わざと食らったのかは解らないが、ディアンとユリアの‘身体’が、無事であったのは事実だった。
偶然だと思っていたが、今考えてみると、運が良い悪いで避けられるような技ではないと気づく。
かといって悪魔が仕組んだ、という可能性も、奴の性格からしてまずありえなかった。

「何が言いたい？　此奴が私の力を制御していたとでも？」

「そういうことだよ」

不意に思った。
クロムは、ガロウが恐ろしくないのだろうか？
これだけ、ガロウを馬鹿にして貶して嘲笑って、殺されるんじゃないかという心配は湧いてこないのか？
クロガネは、彼をじっと見つめてみた。
だが、口角を歪んだように上げて微笑んでいるクロムの本性は、まったく見えなかった。

一方でクロムの方は、そんなクロガネの心配を余所に、さらにガロウに言葉の刃先を向け始める。

「キミは‘邪悪な望みを持つ者’からの攻撃を受けると、姿を現すことが出来るようになるみたいだねぇ」

「…だからなんだというのだ？」

「（……あの時、腕の傷が痛んだのはそのためだったのか…！）」

ポルギアスの攻撃を受けたところから、悪魔が解放されてしまっていたらしい。
腕の傷を見つめて、あの痛みを静かに思い出す。
「そして…悪魔、あんたの能力（ポテンシャル）は面白いと思ったよ！　邪悪なエネルギーを吸い取るっていう意味がどれほどのシステムか見せてもらってね」
「……。」
ガロウは動揺しているのか、無言だった。
「あんたは相手から邪悪なエネルギーだけを吸い取る。つまり相手の方はそのエネルギーを失って、精神が浄化されるんだ！　彼も以前の記憶を失って、善人として生まれ変わっている。」
クロムは指をさした。
その方向には、意識を取り戻したビシャス・シグナル一行の姿があった。
「御前、何処まで知っている？」
ガロウが静かに、重く呟いた。
間違いなく機嫌が悪い。
それも当り前だろう、自分しか知らないはずの能力をここまで語られてしまったのだから。
「別に？　さっきの戦いっぷりを見て俺が勝手に分析しただけだから。でもその動揺の仕方からして、当たってるみたいだね。大丈夫だよ、このことは秘密にしておくからさ」

クロムは全く怯むことなく答えた。
そして、急に笑顔から無表情に顔を変化させ、右手を振りかざした。
「キミを元に戻せるのは俺しか居ないみたいだから…さっさと本題を終わらせて帰るとしよう」
「！　どういう意味だ！？　ッ？？！！」
右手から青い火花が散ると、突然ガロウの黒い体が鱗のように剥がれ始めた。
剥がれ堕ちた部分からは、クロガネ本来の黄色い体が見えている。
ガロウは痛みを感じるのか顔を顰めた。
「がああああああああッ！？？」
一方で、クロガネの身体にも変化が起こる。
何かが引っ張られるような感覚が全身を襲い、そのまま自分が勢いよく闇の中へ引きずられていく。
まるでそりに乗っているような感覚だった。
スピードにたまらず目を瞑った。
「ん？　あれ…ここは…何処だ？」

真っ白な空間で、意識を取り戻した。
ポルギアスがゆっくりと体を起こすと、周りの人がヒィ、と退いた。
何故恐れられているのか解らない彼は、近くにいたハーネルに声をかけた。

「なぁ、俺、なんでこんなに嫌われてんだ？」

ハーネルは手当てをしていた手を止め、ポルギアスを睨みつける。

「あんた、自分が何してたか解ってるの？」

「……。覚えてない。」

「覚えてない？」

「さっぱりな。自分の名前と、御袋と親父の顔以外。」

「呆れた。嘘だったら承知しないから。」

ハーネルはため息をつきながら、包帯を手に取った。ユリアの身体に丁寧に巻いていく姿を見ながら、ポルギアスは彼女に近づいた。

「俺にも、手伝わせてくれ。よく解らないが、俺が殺っちまったのは確かなんだろ？」

「・・・うん。」

ハーネルは潤んだ瞳を慌てて擦りながら、作業を続けた。
ポルギアスも、爪の先を起用に動かして包帯を巻いている。

ハーネルは、振り返り際に、あの悪魔の姿を見た。
やはりあの時と、何も変わっていなかった。

「あれ？」

悪魔の黒い体が、剥がれて・・・

（どういうこと？）

彼女は、持っていた包帯をぽとりと落とした。

「？　どうした？」

「そん…な…。」

嘘だ、嘘だ。
悪魔の正体が…

「クロガネ……？」

だなんて。

クロガネが次に目を開けた時には、身体が自分の意識で動くようになり、消え去ったはずのメモロイが満開に咲く丘の上に降り立っていた。

目の前に、仲間たちや住民の姿が見えた。
クロムを探してみたが、その姿はもうない。

「クロガネ…。」

ハーネルが名前を呼んだ。

「ハーネル！　無事でよかっ…」

クロガネが痛みに耐えながらハーネルのもとに走りよると、彼女の顔はだんだんと険しくなってきた。

「寄るな！！」

「え？　あ…」

クロガネが足を止めて俯く。
ハーネルは後ろの人々を庇うように両手を広げて叫んだ。

「騙してた？」

「え？」

「皆を騙して殺そうとした！　違う？」

「ちが…」

クロガネが一歩踏み出すと、ハーネルは激しく首を振った。

「近寄らないで！　嘘言わないで！」

それでもクロガネは歩みを止めなかった。いや、止めることが出来なかった。

「違うんだ。ハーネル。」

クロガネはそのままハーネルの前へと進み、その震える肩にそっと手を乗せた。

ハーネルはその手を払おうとしなかった。

「私は、私は何のために…。」

ハーネルはそのまま座り込み、傷だらけの拳を思い切り地面に叩き付けた。

「嘘…だろ…？」

「クロガネ…」

ユリアの身体は、氷のように冷たくなっていた。
左胸辺りに傷跡が残っている。

「嘘だ！！」

クロガネは叫びながら突然立ち上がり、ユリアの身体を起こした。
そのまま担いで運ぼうとする。
ディアンも立ち上がり、クロガネの隣でユリアを担いだ。
朝日が昇り始めていた。

「ユリアは生きてる！一緒にギルドへ帰るんだ！！」

太陽は、夜のことなど全く知らないかのように、３人を照らし出す。

ギルドに入ると、真っ先にギアスが目に入った。
正確には、ギアスしかギルドに居ないようだった。
彼は背後の棚からウイスキーを探し、瓶をつかんで豪快に飲み干す。
しかし、そんな事は今のクロガネ達にとってはどうでもよい事だった。

「お、おかえり。」

うつろな目になったギアスがふらつきながら声をかけた。呆れたことにもう酔っぱらっている。

「「ただいま…。」」

クロガネとディアンが顔を上げてギアスを見た。
その時だった。
ギアスが肘をついているカウンターの後ろの扉から、見覚えのある人物が現れた。

「あら。お帰りなさい♪」

「…あ？」
「え？」
「ん？どうした？」
「「ユリア！？」」

その姿は、間違いなくユリアだった。
クロガネは慌てて背負っているポケモンとユリアを見比べる。

「ユ、ユリアが2人！？」

「何馬鹿なこと言ってんの？　私は1人しかいないわよ？」

ユリアはそう言いながらくすくすと笑う。

「でも、ほら…。」

ディアンが言いかけた、その時だった。

ボウン！！！

背負っていたユリアが突然、消えた。

「なっ？？」

「‘身代わり’。自分の体力を使って変わり身を作る技よ…解らなかった？」

「でもその技は…技を数回受けると消えちまうモンなんだろ？？」

クロガネは状況がうまく読み込めていなかった。
確かに、通常の変わり身なら攻撃を受けるか、時間が経過すると消えてしまう。
そう、通常の、ならば。

「ユリアの能力（ポテンシャル）、高品質（ハイクオリティ）だな。全ての技を使いこなす…だっけか？」

突然ギアスが呟いた。
先程の情けない酒飲み顔などすっかり失せている。

「あら、もう一つあるわよ？　技の‘品質’そのものを上げる力。」

ユリアがそれに続いた。

「…品質？　威力とは違うのか？」

クロガネが首を傾げた。
ディアンはユリアの能力がそうであったことを思い出したのか、ため息をついて椅子に座り、頬に肘を当てた。

「勿論！　まあたとえば私が、‘１０万ボルト’を繰り出したとして…仮に相手が地面タイプだったとしたら、どんなに威力が上がっても効果は無い事に変わりはないでしょう？」

「それが…、品質を上げると地面タイプにも効く電気技が出せるようになるってか…？」

「そういう事♪」

クロガネはため息をついた。

「心配させんじゃねぇよ…。」

ディアンが呟いた。疲れたように机に額を付ける。

ユリアは、その言葉が気に食わなかったかのように眉を寄せた。

「貴方たちが思ってるほど、私は弱くないってことよ。」

さらに左手をディアンの方へ向け、‘潮水’を放つ。

「ブブブブッッ！？？？　ちょ…目に入っ…ゲホッ！　わかった！解ったから！　水技は勘弁…！」

ディアンが降参するように両手を上げると、ユリアは満足したように攻撃をやめる。

「……にしても…、いつ‘身代わり’を使ったんだ？」

クロガネは半分ディアンに同情し、苦笑しながら訊ねた。

「あの時よ、ほら、アンタが危ないって言ったとき。」

「ユリア・・・後ろッ！！！」

「え・・・？」

どうやら自分の忠告に従っていたらしい。
クロガネは思い出しながら、ユリアの能力の恐ろしさを知った。
（‘身代わり’を使ったのか解らなかったもんな…高品質（ハイクオリティ）、か…。）
同時に、ユリアに頼もしさを感じていた。
（やっぱ、このギルドは最高だ！）
クロガネは微笑しながら、天井を見上げる。
そのさらに上の景色が、青空であることを想像し…彼女は、呟いた。

「にしても…。」

「さっきまでのシリアスな空気は何だったんだあああああああああッ！！？」

chapter ＋05　真実（後書き）

クロガネ：ホント心配して損した…

ディアン：でもなんだかんだでみんな無事だったな

ユリア：そうね、良かったわ

クロガネ：気になってたユリアの能力も解ってスッキリしたぜ

次回で第一章ラストとなります！

クロガネ：そういえばクロムとか言う奴…どこ行ったんだ？

次回は彼メインになるかと思われますw

クロガネ：そうなのか！？　あいつは色々気になるところがあるしな…

ユリア：何か解るかもしれないわね…

ディアン：オイ待て、誰だそのクロムって？？

ユリアは何だかんだで生きてたから見てたのか…w

そこまで秘密は判明されないと思うけど；

それでは～アディオス★

Epilogue&Nextprologue　クロム（前書き）

さて！今回で1章終了となります！

クロガネ：遅いぞ；

そうだね；

まあ気にせず！

クロガネ：ああ？気にしろよ（怒

今回は色々また起こっているようですw

それでは9話！

クロガネ：スタートだ！

Epilogue&Nextprologue　クロム

「御届け物でーす！！」

「やっと来たー！！　オレの万年筆！」

デリバードの配達員からクロガネは笑顔で郵便物を受け取った。
丁寧に包まれた包装紙をビリビリと荒く破ると、万年筆の漆黒のボディが覗いた。

「昨日気付いて今日の朝来たか…、割と早いんだな。…ヒック！」

ギアスは片手にウイスキーを持ちながら、よろける手で受け取りサインを記入する。

「またの‘デリ便’のご利用をお待ちしております！」

デリバードは帽子を下げてあいさつした後、ギルドを出て行った。

「安いし早いからまた利用すっか…うっぷ。」

「にしても、旅館に自分の武器を忘れるなんて、クロガネも馬鹿だよな」

ディアンが笑いながら言う。

そう、クロガネは旅館‘居龍庵’に万年筆を忘れ、そのままギルドに戻ってしまっていたのだ。

「それにしても…宿泊代が前払いでよかった…。じゃないと私たち、今頃…。」

3人はジバコイル保安官に手錠をかけられるシーンを想像し、身震いした。

「じゃあ、特訓でも始めようか！　うっぷ！」

「特訓？」

「‘ブルーサークル’！！！！！」

万年筆で空中に円を描くと、そのまま円は直進し広い草原にある、遠方の的に的中した。

「へぇ、インクの色を変えることによって技も違うものが出せるのね…。」

「親方ァ、何時思いついたんだ？」

「始めに出会ったとき／／」

「そんな一目惚れみたいな感じで言うな気持ち悪い。そして何で照れる？」

そんなこんなでクロガネ達は特訓を重ねていた。
特にクロガネは、技が，万年殺し，だけとなると心細いし、ガロウの事も考えて、チームメイト総出で新技開発に乗り組んでいる所だ。

「空中に形を描くとその形が動いて技となるわけだ。何だか……、キモいな。」

「手前に言われたくねぇよ酒飲みオッサン！！」

珍しく酒を飲んでいないギアスにクロガネが石ころを投げつける。

「グホォ！」

脳天にヒットし倒れこむのを確認。
何やら赤いものが見えたが、気のせいだと思いたい。

「えーと、インクの色でタイプが決まるみたいね。さっきのは青だから水タイプ技になっているわ。証拠にほら！」

ユリアが指をさす方向を見ると、先ほど見事にヒットさせた的が、水でびしょびしょになっている。

「万年筆じゃなくて鉛筆とかでもできそうだぞ？」

クロガネが得意げに笑いながら、万年筆を背にかけた。
ギアスが購入したのはインクだけではないらしく、彼の近くにはまだ削ったばかりの鉛筆が数本転がっていた。

クロガネがそれに近づいて、感嘆の声を上げた。

「おお！スゲェ！虹色鉛筆じゃないか！！」

赤鉛筆、青鉛筆などが並ぶ中、それは一際目立った存在だった。
先端が7色に分かれているという、あれだ。

「これはあくまで俺の推理だが…、その鉛筆を使うと、全タイプの技が使えるようになると思うぞ。」

「7色しかないのに？」

ディアンが突っ込むと、ギアスが答えた。
珍しく真面目だ。
あるいはいつもこんな感じなんだろうか？

「攻撃の時に鉛筆を振ることによって、色によるエネルギー同士が混ざり合い、新たなタイプを生み出す。7色もあれば作れる色は無限大だろ？だから、クロガネは全タイプのエネルギーを放てる…ということになる。」

ちょっとからかってみようか。
とクロガネは不意に思った。

「そんなに言葉を並べるより、こうやった方が早く解るよな！　それっ！『夢色殺し』！！」

「ッッ！！！！！？？？　冷てぇ！！」

「ブブブブブ！！！？？？　うわっ！水じゃねぇか！」

クロガネが7色鉛筆を振ると、ギアスとディアンにそれぞれ別の反応が現れた。

推理は的中していたらしい。

「考察、効果抜群の技に変化した。これね！」

ユリアが綺麗にまとめてくれた。

「夢を見させてやったぜ…フッ。」

クロガネは苦しむ2人を見て妖笑するのであった…。

同時刻　　とある町

ここは、ランカイシティ。クロック・アースよりはるかに南に位置し、気候は至って温暖、四季が存在し、現在は秋という有名な大都市である。
ビルが辺り一帯に立ち並び、その間を人々が行きかう。
１００階以上ある高層ビルや、ショッピングモールなども数多く存在し、一見、便利な都会に見える。
しかし、この都会都市では貧富の差が激しかった。
田舎から来た人は主に出稼ぎが多く、優秀な学校を卒業していたり、大富豪の家であったりしない限りは、出世がかなり厳しくなっている。

また、ビルが建っている大都市、というのは表の顔で、裏路地では、薬物の密売などが頻繁に行われていたり、暴走族による被害が多発していたりしていたりする。

そんな、都会の裏路地にて、とある事件が起ころうとしていた。

「ハァ…！　逃げなきゃ…。逃げなきゃ…！！」

一人の少女が、ビルとビルの暗い隙間を駆け抜けている。
黄色いからだと、菱形の耳が特徴的な、ピチューだ。
彼女は、同じ言葉をとぎれとぎれに何度も言いながら、全速力で真っ直ぐな道を走っていく。
細道で視界も狭い中、彼女が何をしているのか？

「…ッ！！！」

突然ピチューの足取りがふら付いた。
よく見ると右脚に怪我を負っており、痛みに耐えながら走ってきて

いるらしい。

「…ここだ！」

スタミナをほぼ使い切った彼女は、偶然見つけた小さな隙間に身を隠した。
そこは、ごみの残骸が残っており、生臭い臭いが鼻を突いた。
ピチューはその臭いを気にすることなく、自分が丁度入りそうな木箱の中に隠れた。

彼女が一体何をしているのか？
それは、すぐ解った。

「あぁれぇ～？　オッカシィナァ？」

先程ピチューが走り抜けてきた道に、不意に誰かが現れた。
茶色の身体に目立つ黄色いラインが特徴の、ミルホッグだ。
尻尾にリボン、肩ににキーホルダーのジャラジャラ付いたスクールバッグを持っている姿からして、女子高校生らしいことは解った。

「この辺に逃げたんじゃない？トカ思ったんだけどぉ～、居ないねぇ？どこに逃げたのかなァ？ドブネズミちゃん？」

ミルホッグはニヤニヤと怪しげな笑みを浮かべながら、ピチューの走り抜けた道を、真っ直ぐ、その通りに進んでいく。
よく見ると、ミルホッグの後ろには、ハートのマークが目立つコウモリ、ココロモリと、小さな、ゴミ袋から生まれたといわれるヤブクロンが居た。

やはり同じ格好をしている。
彼女らはまるでかくれんぼでもしているかのように少しずつ、少しずつ近づいてきた。

「……ッ！！！」

ピチューは自分の身体を震える腕でしっかりと抱き、恐怖に耐えている。
落ち着いて呼吸をしようとするが、息を吐き出すたびに震えは酷くなった。

ミルホッグ達は、ピチューが隠れた木箱の前で止まる。
ピチュー本人はそれに全く気付いていない。
隙間のない木箱の中から外は見えないのだ。

ミルホッグが顎でヤブクロンに合図を送る。
その瞬間、ヤブクロンはいきなり木箱に向かって突撃した。

「見ぃつヶた♪」

木箱がバラバラと壊れ、中にいたピチューが宙に飛ばされた。

「キャ……ッ？！！！！」

ピチューが飛ばされるのと同時に、何処からか取り出したひもで彼女の手を縛るヤブクロン。
さらに追撃を掛けるように、ココロモリがピチューの口に布を捻じ込んだ。

「ふぐ！？ふおお！！」

口に布が詰め込まれ、上手く話せなくなったピチュー。
そんな彼女に、ミルホッグ達はジリジリと迫っていく。

「聞いたわよ、アンタ。転校したんだって？」

「……！！」

ミルホッグが放った何気ない言葉が、ピチューに突き刺さる。

「あのネリアスの引き立て役だったアンタが、ネリアスが居なくなるとすぐ転校してっちゃったよね？」

「ひがふ！！」

ピチューはしきりに首を左右に振る。
その姿を見ると、彼女たちはさらに笑みを恐ろしいものに塗り替えていった。

「本当は貴女がネリアスを引き立て役にしていたのかしら…？恐ろしいわねぇ。まるで蟯虫みたい♪」
「蟯虫！」
「メグの蟯虫！」

‘蟯虫’。
その言葉を聞くと、ピチューは黙り込んでしまった。

確かに、そうかもしれない。
私は、こうやって虐める人を黙らせてくれるネリアスを、利用して

いたのかもしれない。
彼女から嫌われて追い出されないように、必死でくっついていたのかもしれない。
でも、ネリアスは友達だ。
たとえネリアスにとって私が‘引き立てるために作った友達’だったとしても、私はそれを許すことが出来る。
いまでも、彼女のことを大切な友達だと思っている。

「今日は８月１６日！　アンタのお誕生日ね！」

ミルホッグが手にライターを握った。
学校の規制によって、本来所持するのも反する行為に当たるものだ。
ピチュー、メグの脳裏に、嫌な予感がよぎる。
ライターが、口の中の布に近づいていく。

「さて問題よ♪このライターの火をつけるとぉ、貴女の口はどうなってしまうでしょうかぁ？」

「……！！！」

メグが避けようと後ろに下がると、壁にぶつかった。

「（行き止まり…？！）」

ほかの手段を探そうと考えたが、手が縛られているため探ることもできなかった。

「ブブー！時間切れ！正解できなかったメグちゃんには～、罰ゲームの時間で～すう♪ハッピーバースディ～～～♪」

ライターの炎が近づいてくる。
メグは思わず目を瞑った。
口の中がじわじわと熱くなってくるのを感じていた。

熱い。
私、このまま口の中火傷して、何も喋れなくなっちゃうのかな…？
ネリアスちゃんみたいに。
当然の事かもしれない。
私、いままで沢山嘘ついてきたし、ネリアスちゃんも護れなかったから、こうなるの、当たり前なのかもしれないな。
でも、嫌だ。嫌だよ。
私だって自由に生きていいはずだよ？
どうしてこんなことされなきゃいけないの？
私何にもしてない。あなたたちに何かした覚えなんてない。
どうしてそんなことをするの？
なんで笑ってるの？
熱いよ。
……ああ、また私、誰かが助けに来てくれるって思ってる。
馬鹿みたい。あの時とは違うのに。
こんな私を見つけても、みんな知らん顔するにきまってるのに。
死んじゃうのかな。
でも、後悔なんてないや。
やっとネリアスちゃんのところへ行けるよ…
熱いよ。熱いよ…。

メグの意識が遠のいていく中で、ミルホッグ達の声が聞こえてきた。

「誰？」

それは、突然現れた。

「おや、虐めかい？　カッコ悪いねぇ。実によくない。」

気配も、足音もなく、突然、彼女達の間に現れた。
黒い身体に、赤い毛並み。瞳をブルーに光らせる、幻影を見せるというポケモン。

「誰だって訊いてんだよオッサン！！」

ピキッ。
何かが壊れた音がした。

「あああああああああああああああああああ？！！」

瞬間、ヤブクロンが叫び声をあげた。
彼女の握っていた携帯が、真っ二つに切り裂かれていた。
薄いピンク色の携帯には、鋭い爪痕が残り、そこからはわずかながら煙が出ている。

「17歳の俺をオッサンというなんて、キミも随分と勇気があるんだねぇ。」

彼の長く鋭い爪が、闇の中で爛々と光る。
それはつまり、携帯を壊したのが彼であるということを示していた。
見えない数秒間の攻撃に、ミルホッグ達は相手が相当強いポケモン

だと察した。
そして、喧嘩を振ってしまった事を後悔する。
だが、もう遅かった。

「俺の名前は、クロム。この町で情報屋をしてる。」

「ッ！　クロム？！！」

ミルホッグが声を上げた。

「おや、俺の事、もしかして知ってた？そうだとしたら光栄だね。」

ミルホッグは驚きで声すらあげられなかった。
聞いたことがある所か、「クロム」、彼の名前は、この町で喧嘩を売ってはならない人物と噂されているものだった。

「キミ。俺を怒らせちゃったみたい♪」

「は？」

迫力に圧倒されながらも、何とか返事をするミルホッグ達。
しかし、彼女の頭は少しずつ整理されていった。

「（大丈夫。私にはあれがあったわ…。）」

それは通常であれば死亡フラグが立った時のセリフなのだが、彼女にとって確実な自信を与えるものだった。

「出ていきなさい！」

ミルホッグが叫ぶと、それぞれの場所からたくさんのポケモンが現れた。
ダゲキにナゲキ、カイリキーなど種族はさまざまであったが、‘格闘’タイプであることは全員に共通していた。
「‘格闘闘志（ファイト・スピリット）’？」
クロムは目を細め、最近よく耳にする‘暴走族’の名前を口にする。
彼らは最近、この都市で悪事を働き、その名を広めていた。
「へぇ。俺に女の子を殴る趣味が無いからって、こんなに相手を準備してくれるなんてねぇ。」
「何ボサッとしてるのよ！？　早くあいつを殺して！！！」
ミルホッグは恐れのあまりクロムの話すらまともに聞けていないようだった。
物騒な命令に従い、格闘ポケモンたちは次々とクロムに攻撃を仕掛ける。
「『インファイト』！」
「『爆裂パンチ』！！」
「『気合い球』！」
どれも悪タイプのポケモンに大ダメージを与える技だ。
しかし。
「フフフハハハ！！！　『ナイトバースト』！！！」

クロムは怪しげな笑みを浮かべながら両腕を地面に叩き付ける。
その瞬間、地面から黒い衝撃波が発生し、向かってきたポケモンたちを蹴散らしてしまう。

「ハハハハハアハハハハハハハハハハハハハハハハハハ！！！！！！」

クロムは飛び上がると、リーダーと思われるカイリキーに向かって飛び上がり、そのまま馬乗りになった。
更にその状態のまま、カイリキーの顔面を只管殴っていく。

「ぐおっ！グハッ！うっ！！ぐっ！」

数回殴ると、カイリキーは気絶してしまった。

「よ、よくもボスをおおおおッ！！！」

パニックになったのか、『爆裂パンチ』を構えながら走ってくるキノガッサ。
クロムはその攻撃をいとも簡単に片手で受け止め、そのまま『火炎放射』で返り討ちにした。
そのままクロムは笑いながら残りのメンバーを一人ずつ潰していく。

「ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ！！！」

「あ、ああ…。」

ミルホッグ達はその光景を見ていることしかできなくなっていた。
最早、誰が誰を虐めていたのか、すっかり解らなくなっていたのだ。
遠のく意識の中で、彼女達はわずかに痛みを感じていた…。

「さぁ、次はキミ達の番だよ。」

「ふぅ、全員片付いたね。もう出てきても大丈夫だよ。」
クロムが後ろを振り返ると、壊れていたはずの木箱からメグが恐る恐る出てきた。

あの木箱も、口に布を入れられたメグも、すべて、幻影（イリュージョン）、だったのだ。
先程の狂気に満ちた顔が嘘のように消え、今度は、本当の、笑顔を見せるクロム。

「あ、あの、ありがとうございました！！」

そんな彼に恐怖を抱いたのか、メグはぺこりと頭を下げると、すぐに走って行ってしまった。
彼女の後姿を見ながら、彼はため息をついた。

「お礼を言われるほどの事をした覚えは無いんだけど？……まあいっか。」

クロムは何処からか紙を取り出し、その内容を改めて読み直した。

～依頼　ギルド　ロイヤル・クオーツ様
ランカイシティで最近多数の犯罪を犯しているという青年暴走族、格闘闘志（ファイト・スピリット）。このグループは、将来ブラック・ギルドに成長する可能性が極めて高いと判断された。ギルド、ロイヤル・クオーツ、のクロム殿へ、極秘任務としてこのグループの排除を依頼する。報酬２５００ポケ。御健闘を祈る。　　ギルド連合軍～

Epilogue&Nextprologue　クロム（後書き）

クロガネ：あいつ…やっぱり謎だな…

ちなみに今回出てきたランカイシティとメグちゃんは、次章にも関わってきますw

ユリア：それは楽しみね♪

次章、お楽しみに！

ｃｈａｐｔｅｒ　＋０６　某ギルドにも新入りはやってくる（前書き）

お待たせしました！新章突入です！

クロガネ：今回は新キャラもいるみたいだな…

物語を盛り上げてくれる重要な役となりそうです！

？？？：それじゃあ、第１０話、行こう！

クロガネ：おう！って誰だお前！？

chapter ＋06　某ギルドにも新入りはやってくる

「なかなかいけるな！　納豆トーストも♪」

朝食のトーストをかじりながら、クロガネは呟いた。
隣のギアスはというと、大盛りのサラダを勢いよく口に運んでいる。
というか、流し込んでいる。
先程クロガネが「いつか気管につっかえて死ぬぞ」と忠告したのだが、この様子だと無視しているらしい。
ちなみに、ギアスは大の肉嫌いで、野菜と酒しか飲まない。ちょっと怪しいところだが、現に彼は野菜しか食べていないので信じても良さそうだ。
と、クロガネは判断した。

このギルドでは朝・昼・夜すべての食事がバイキングとなっており、食品も御飯にラーメン、高級ステーキなど品揃えが良いため、食事にほとんど不自由はしない。

さらに、ローズクオーツ回収任務成功に当たり、一人一つ分の部屋（ベッドとデスク付き）をギルドに追加したため、ここは名前に劣らずロイヤルなギルドとなった。

解説はさておき、そろそろクロガネ達に戻ろう。

「あ！そういえばさ、ギアス。」
「なんだ？俺に用とは珍し…くもないか。」
「まあ最近はな。ってそれはいいとして、一つ、聞きたいことがあ

るんだけど。」
「？」
ギアスは特大サラダボウルを机に置き、首を傾げた。
「あのさ、‘クロム’って奴について、何か知らねぇか？」
「ん……？お前、クロムを何で知ってるんだ？」
「え？あっ、いや…その…」
真剣な目つきのギアス。
この間の出来事は、素直に話してもいいものなのだろうか？
あの事件をうまく丸めこめてくれたのはクロムだが、そのことはまだギアスに正確には伝えていなかったのだ。
「（話すと面倒な事になりそうだな…）…うん、まあえっと、色々とあってな。不思議な感じだから、何か知りたいな、と思っただけなんだけど。」
「……。」
「あ、いや！言えない事なんだったら追及はしないからいいんだ！別に！」
隠し事が苦手なのか、誤魔化し始めるとクロガネは急に慌てたように早口になった。無論自覚はない。
「いや、俺が話しても何の問題もないからな、話してやってもいい。」
ギアスはそんなクロガネの態度に怪しいと感じることもなく、自ら口を開いた。
若干上から目線なのは棚に上げておくとしよう。

「あいつはな、俺のギルドの…」

ドオオン！

「たぁぁぁぁぁぁのもぉぉぉぉぉぉうッッ！！」

ギアスが言いかけた途端、背後の壁が勢いよく破壊され、同時に威勢のいい声が飛び込んできた。

「おい、何だあいつ」「やだ、道場破りかしら？」「んな馬鹿な！？」

ギルド内で騒ぎが起きる中、綺麗に穴の開いた壁を突っ切って出てきたポケモンがいた。

二つ頭の黒き龍、ジヘッドだ。

見た目は暗黒なイメージがあり、どちらかというとブラック・ギルドに所属しているような様子でもあったが、身体は傷だらけ、おまけに息は荒く肩を激しく上下させている。

見るからに道場破りなどできそうにない。そもそも来る場所でも間違えたかのような出で立ちだ。

「はあ、はあはあ。」

「オイ、あいつ来る前から弱ってやがるぜ？」「舐めてんのか？」

「どうしてこんなところに…？」

「御前等は少し黙ってろッ！！」

「！！　……。」

ざわめくギルドを一言で沈黙に落とすガブリアス、ギアス。
彼はそのままジヘッドに近づいていく。
相手の方はというと、ギルドの親方格に少しも臆することなく、声を上げて言った。

「あ、あのっ！！　お、オイラを、ギルドに入門させてくれませんかッ！！？」

沈黙。いや、静寂がギルドを包んだ。
ギルドのメンバーの脳内では、混乱が渦巻いていた。

「（お、おい、初めに「たのもう」とか叫んどいて入門する奴ってどうなんだよ）」
「（さ、さあ…親方次第なんじゃね？下手すりゃボッコボコにされたりよ…）」
「（ま、マジか……。）」

「うん！気に入った！」

「え？」

「威勢のいい奴は大ッ歓迎だ！お前を、このギルドのメンバーにするぜ！」

ギアスは大声を上げながらジヘッドに近づき、その肩をバシッと叩いた。

「さ、さっすが親方だぜ！！」

唖然としていたギルドのメンバーたちも、新入りの歓迎を大いに喜んだ。

一方でクロガネは納得できないようで、ギアス達のもとへ近づいた。

「お、おい、いいのか？？最近は物騒な奴等も多いッつーのにそんな簡単にメンバーなんかにしても！？？」

「まあ確かに悪い奴もこの世にうじゃうじゃ湧いてやがるけどよ、このギルドの仲間たちはみーんな！いい奴等なんだぜ！」

「……。」

「そんなに警戒することもねーだろ。みーんな疑って、誰も信用できなくなっちまったら、いつか独りぼっちになっちまうもんだぜ？」

「……。」

クロガネは腑に落ちていない様子だったが、それ以上は何も言わな

かった。
ギアスはジヘッドにコーヒーを出すように言い、名前を尋ねた。
「ああ、えっと、オイラ、レッカっていいます。」
「へえ。いい名前じゃねーか。んじゃ、レッカはクロガネのチームに所属な。」
「マジで！？」
クロガネは飲みかけのココアを吹いた。
幸い誰にもかからなかったが、テーブル一面が汚れてしまった。
「何を言ってるんだ、お前らのチームしか空いてないんだ。ッてなわけであとは頼む。」
「なっ！おいちょっと待て！」
クロガネは呼びとめようとしたが、ギアスは振り向きもせず去って行った。
その時、ちょうど外からユリアが帰ってきた。
ユリアの眼は新入りよりテーブルの上に行ったらしく、ココアまみれの様子を見て一言、「ナニコレ」と顔を顰めた。
「ああユリア、こいつ、さっき俺らのチームに入ることになったレッカだ。」
「ええ！？新入りさんがやってくるなんて珍しいこともあるのね、まあでも嬉しいわ。」
ユリアは一瞬驚いた表情になったが、その後すぐに穏やかな顔になった。
「そうだな、よろしくな、レッカ！」

クロガネはレッカに手を差し伸べた。

バシッ

「イタッ！」

一瞬何が起こったのか、クロガネは解らなかった。
差し伸べた手が赤く腫れている。
どうやら握手しようと手を差し伸べた瞬間、思い切り頭で叩かれたようだ。

「…ッ！お前！何しやがんだ！！！」

クロガネは反対側の手で相手の首根っこをつかみあげた。
レッカの方はというと、少しも顔色を変えることはなく、あくまで冷静に言い放った。

「さっき君に思い切り疑われたんだ。そのあとに握手？謝られてもいないのに？こっちの気持ちにもなってよ！」
「なんだと…！？」

クロガネの顔に血管が浮いた。
首をつかむ手にも多少力が加わる。

「暴力で解決なんて、やめてくれよ！」
「先にやったのはどっちだってんだよ！」

少し顔を顰めるレッカ。クロガネが後ろに拳を構えた。

「ッ！！…クロガｎ…」

止めようとユリアが呼び止めたが、遅かった。
鈍い音がする。
その数秒後に壁にぶつかる音がした。
血を吐いたレッカが壁に思い切り叩き付けられていた。
クロガネが拳を突き出した状態のまま静止している。

「アンタ！何やってんのよ！レッカ、大丈夫！？」
「……ハッ。」

我に返ったように立ち尽くすクロガネ。
無意識のうちに、などと言い訳にさえならないが、まさにそんな状況だった。
遠くに映るのは、ユリアに支えられながらゆっくり立ち上がるレッカ。

（俺は…一体何を…。）

謝ることもせず、歯を食いしばるクロガネ。
レッカはそんなクロガネを静かに見つめていた。
ただ憎むことも、嗤うこともせず。

「はあ…。ったく、仲良くしなさいよね…。」

ユリアは疲れたようにため息を吐く。

「たっだいまー！ってあれ？どうなってんだ？？」

その時、高らかな声を上げてディアンが帰ってきた。
空気を読んでいないだけなのか、それともわざとなのか解らない。
誰も応えない様子を見て、ディアンはメンバーに一枚の紙を見せた。

「新入りの話は聞いたぜ、よろしくな。早速だがこれ、さっき親方から渡されたんだ。次の任務だぜ！」
「へぇ、どれどれ…」

～ジュエル‘ダイヤモンド’の回収～

「面白そうね、じゃあ準備が整い次第向かいましょうか！」
４人はその声に、部屋に散らばって準備を始めた。

ギルド　地下のバーにて

「…このギルドの奴等はみんないい奴、何て、ついさっき言っちまったけど…俺が言えるような事じゃなかったな。」
「あら、どうしたの、親方さん。」
「ああ、すまねぇな、マチル。」

「いいんですよ♪親方も色々あるみたいなんですし。」

「いやさ、このギルドの奴等もみんないい奴だって限らねぇな、ってさ、ふと思ってよ。」

「あら、そうですか？皆さんいい人たちばかりだと思うんですけど…。」

「御前は、知らなかったっけか。まああいつ、最近顔見せねぇからな、みんなに。」

「？」

「でもにしては、クロガネは何で知ってたんだ…。謎だな。」

「さっきから話が見えませんわ、親方。」

「このギルドで唯一信用しちゃいけねぇ奴の話だ。あいつは、誰も信用しちゃいない。誰も信じていないからこそ、まわりの人（ポケモン）の行動に興味を持って、まるで俺らを実験用具のようにしやがる。でも、よくよく考えれば…あいつの性格変化に、クロガネも関わってるかもな…。丁度一年前の話だしよ…。」

「……。」

「ハハハ！良く解んねぇって顔してやがるな。まあ、一応教えといてやるよ。このギルドで、唯一信用しちゃいけねぇ奴、そいつの名前は……。」

「クロム、って、何だか新しいメカの名前みたいよね。」

「俺を勝手にそんなつまらないものにしないでくれるかな？」

ランカイシティ　某マンション

そこは、都内でも特に有名な高級マンションだった。
深い紅色のカーテンで閉め切られたその部屋は、昼間だというのに明るさという物を一切感じさせなかった。
何処か西洋の香りのするカーペット、僅かに黒光りする書斎、そして高級そうなオフィスチェア。
その一室だけでこの家がかなり上品な住まいであることが解る。
そして、勘が良い者なら、ここが一般人の来るような、いや決して入ってはいけない空間だと感じる筈だ。

「いい加減ここから出してくれないかしら？もう我慢の限界よ。」
「もう少しだ、あとひと仕事さえしてくれたら、解放してあげるよ、ネリアス。」

クロムは戸棚から数枚のレポート用紙を取り出し、書斎の上に置いた。
中学生ぐらいかと思われる少女の声がするが、そこは暗闇に包まれていて、様子が窺えない。
そのままクロムはノートパソコンを開き、なにやらせわしなくキーボードの上で指を躍らせ始めた。

「あんたがたのむ仕事って、ほとんど雑用じゃない？まあでも、これで私をメグのところに返してくれるって言うのならやるけれど。」
「キミの思考はあくまで単純だね、メグ、彼女のために動くという一つの目的しか頭にないのかい？」
「それほどあの子が私にとって大切だという事よ。」

その言葉を聞くと、クロムは一度身体を逸らし、高らかな嗤い声を上げた。

「面白いねぇ。あ、そういえば、キミがそんなに想っているあの子本人の方は、キミを護れなかった責任をまだ感じちゃってるみたいだよ。」
「そうなの…。ああ！あの子に会って私が無事であることを早く伝えたいわ！」
「じゃあ、今回の仕事も、さっさと終わらせないとね？」

クロムはそう言いながら、マウスを動かす。
突然、獲物を見つけた鷹のような目になり、そのままパソコンを闇

の中の彼女へと見せつけた。

「次にやってほしい仕事は、これだよ。」

そのページに映っていたのは、とあるブラック・ギルドの名前と、その彼らの獲物(ターゲット)…ダイヤだった。

ｃｈａｐｔｅｒ　＋０６　某ギルドにも新入りはやってくる（後書き）

ユリア：新入りとは仲が悪いみたいね…

こりゃ、先が思いやられるね

ディアン：任務は簡単にいかないからな、早く仲良くなるといいな

次回、いよいよ回収作業！

ユリア：お楽しみに♪

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5855q/

ピカチュウと極彩色

2011年10月7日03時54分発行